

杜甫の作品における玄宗像の研究

文学研究科

言語文化学専攻 中国語中国文学専修

2025年度

BBC24020

こう ぼうじゅん
高 望 淳

目次

序論.....	1
第1章 杜甫の玄宗時代の作品における玄宗像	7
1.1 開元の盛世（713～741）と杜甫	7
1.2 杜甫の天宝年間（742～756）の作品における玄宗への賛辞.....	12
1.3 杜甫の天宝年間（742～756）の作品における玄宗への批判.....	18
1.4 「自京赴奉先県詠懷五百字」における天宝末年の玄宗像と杜甫	25
第2章 杜甫の肅宗時代の作品における玄宗像	32
2.1 杜甫の至徳年間（756～758）の作品における玄宗像	32
2.2 乾元～上元年間（758～761）における肅宗と玄宗	38
第3章 杜甫の代宗時代の作品における玄宗像	50
3.1 宝応～永泰年間（762～766）の社会状況と杜甫	50
3.2 杜甫の大暦年間（766～770）の作品における玄宗時代への回顧	64
終章.....	82
参考文献	87

序論

研究の対象と背景

杜甫（712～770）は、中国における最も傑出した詩人の一人である。杜甫の詩は唐王朝の隆盛から衰微への歴史的展開と、それに伴う社会状況の変化を如実に描写したことから、「詩史」と称された¹。また、芸術の面においても、彼の詩は前代の詩人たちの優れた伝統を受け継ぐと同時に、とりわけ七言律詩において繰り返し革新を試み、中国古典詩の発展に深い影響を与えたとされる。こうした歴史的価値と芸術性の両面を兼ね備えた点により、宋代以降の文人たちは杜甫を詩人の理想像として位置づけ、「詩聖」と称するに至った²。

さらに、杜甫の詩に見られる「忠君愛国」の姿勢も、彼が「詩聖」とされて広く尊敬される要因の一つである。儒教思想を基調とし、君臣の秩序を重んじる古代中国の封建社会において、杜甫が詩に示した忠君意識は、理想的な道德規範として受容されてきた。とりわけ理学が隆盛を極めた宋代において、多くの文人が杜甫の詩法を学ぶと同時に、彼の君主への忠誠を高く評価している。例えば、蘇軾は「王定国詩集叙」において、杜甫の忠君の姿勢が「一飯未だ嘗て君を忘れず」の一句に凝縮されていると述べている³。また、李綱は「彼の平生の忠義の心は、多くは詩の中に開陳されている」と称賛するに至った⁴。

一方、現代中国においては、1949年の中華人民共和国成立を契機に、社会主義の政治体制へと移行した。封建社会の君主制度の消滅により、「忠君」という伝統的な倫理観は現実的な基盤を失うこととなった。このような政治背景を踏まえ、学界では杜甫の忠君意識を批判する見解が多く示されている。たとえば、羅宗強は「彼（杜甫）が封建的地主階級の政権に忠誠を尽くしたことは疑いようがなく、その中

¹ 唐・孟棻『本事詩』（中華書局、1985）10 頁に「杜逢禄山之難、流離隴蜀、畢陳於詩、推見至隱、殆無遺事、故當時号為『詩史』。」とある。

² 王国欽「杜甫『詩聖』称号の由来及意義」（『中原文学』2025 年 10 月）を参照。

³ 宋・蘇軾『蘇軾文集』（中華書局、1986）巻十、318 頁に「一飯未嘗忘君」とある。

⁴ 宋・李綱『李綱全集』（岳麓書社、2004）巻十九、248 頁に「平生忠義心、多向詩中剖」とある。

には愚忠も含まれている」と明言している⁵。こうした評価は、杜甫が封建社会の枠組みを超えることができず、政治体制そのものに対する根本的批判を欠いていた点に注目するものであり、五四運動（1919）以降に掲げられた自由・民主・反封建といった思想潮流とは相容れない存在として位置づけられている。

他方、杜甫における「忠君」と「愛国」との統一性を強調し、杜甫の「忠君愛国」の立場を擁護する見解も存在する。例えば、莫礪鋒は、杜甫の忠君の対象は特定の君主ではなく、理想的な明君であり、その忠誠心は「仁政」という政治理想の追求に根ざしていると述べている⁶。また、張忠綱は、マルクス主義の歴史観と孟子の思想を結びつけ、「忠君」とは本質的に「愛国」および「愛民」を意味すると主張する⁷。さらに、葛曉音は、杜甫の忠君思想と愛国精神とは混同されていると論じている⁸。このように、一部の研究者は、「忠君」という概念の内包を拡張することによって、杜甫を現代的文脈における愛国主義の詩人として再構築しようとしている。

以上のように、中国の学界においては、杜甫の忠君意識をめぐって多様な解釈が提示されてきた。これに対し、日本の学界における杜甫の忠君意識への評価は次のようである。

まず日本中世の禅林においては、室町時代の義堂周信や惟肖得巖らが、杜甫の詩に反映された「忠」「孝」「義」といった品格を高く評価した。太田亨の研究によれば、これは古代中国における儒・道・仏のいわゆる「三教一致」の思想が、日本に浸透したことによるものであるとされる⁹。また、江戸時代の『杜律集解』においても、杜甫の「忠厚惻怛（まごころ厚く懇切）」が、その詩が後世において「詩史」

⁵ 羅宗強『李杜論略』（内蒙古人民出版社、1980）57 頁に「毫無疑問、他忠於封建地主階級的政權、而且其中包含着很大成分的愚忠」という。

⁶ 莫礪鋒『杜甫評伝』（南京大学出版社、2011）289 頁に「但我們認為杜甫的忠君思想最主要內涵并非不分青紅皂白地忠於一人一姓、而是希望通過賢明的君主以施行仁政」という。

⁷ 張忠綱「憂国憂民无已時—杜甫愛国思想瑣談—」（『杜甫研究學刊』1995 年第 3 期）1～3 頁を参照。

⁸ 葛曉音「略論杜甫君臣觀念的轉變」（『中州學刊』1983 年第 6 期）90 頁に「杜甫所謂忠於天子在實際上已經与忠於國家的觀念混為一體」という。

⁹ 太田亨「日本中世禅林における杜詩受容—忠孝への関心(中期の場合)・詩文詠出の様相—」（『中國中世文學研究』2015 年 3 月）80 頁に「禅僧が杜甫と忠義を深く結びつけるようになったのはなぜであろうか……渡来僧の手によって三教一致の思想が浸透し……」という。

および「詩中の経」と称されるようになった要因の一つであると指摘されている¹⁰。さらに、近年の日本の学界においては、例えば齋藤勇が杜甫を「忠君憂国の士」と位置づけ、「心から君に忠にして、真に国を憂へずには居られない」と述べている¹¹。これは、前述した現代中国学界における杜甫の「忠君」と「愛国」との統一性を強調する見解と軌を一にするものと理解できる。

筆者は、「忠君」という倫理観念が現代社会においてすでに実質的な意味を持たなくなっているものの、杜甫の忠君意識についての考察は、なお重要な研究価値を有すると考える。皇帝および朝政に関する叙述は、杜甫の作品内容を構成する重要な要素であり、そこに表出される忠君意識もまた、彼の人なりを理解する上で重要な側面の一つである。しかしながら、現代中国および日本の学界においては、杜甫の作品に見られる国家の運命に対する憂慮や民衆の生活への関心が重視されてきた一方で、忠君意識を反映する皇帝に関する叙述については、相対的に十分な検討が加えられてきたとは言い難い。そこで本論では、杜甫の詩に繰り返し登場する玄宗像を分析の中心に据え、関連作品の創作背景および歴史的な文脈を踏まえつつ、杜甫の玄宗に対する態度の変化を考察し、その忠君意識の展開過程を明らかにすることを目的とする。

先行研究について

杜甫の作品における玄宗像を研究対象とした論文は未だ少ないが、以下の研究は本論にとって最も重要な参考資料となる。

第一に、本論の内容と深く関係する研究として、魏耕原「杜甫与唐玄宗、肃宗、代宗」（『杜甫研究学刊』2019年第1期）および陳夢熊「杜甫詩歌中的帝王形象」（『銅仁学院学報』2014年第16卷第6期）が挙げられる。魏耕原は、杜甫の作品には玄宗に対する賛辞のみならず、「諷君」の姿勢を反映した玄宗

¹⁰ 二宮俊博『津阪東陽「杜律詳解」全釈』（二宮印刷工房、2013）巻下に「識者はかくて推称して『詩史』とみなし、さらに尊んで『詩中の経』とみなした。その忠厚惻怛（まごころ厚く懇切）なること……」とある。

¹¹ 齋藤勇『杜甫:その人、その詩』（研究社、1946）10頁。

の治世への批判も併存していることを指摘している。また、陳夢熊は、杜甫の詩に見られる則天武后・玄宗・肅宗に関する描写を分析したうえで、杜甫の帝王への認識は次第に客観化していく過程を辿ると論じている。もっとも、これらの論文はいずれも、杜甫作品に登場する複数の君主像を対象として分析を行っているものの、考察の対象となる作品は限定的であり、杜甫の作品全体を通じた玄宗像の変容については、必ずしも十分に論じられているとは言い難い。

第二に、杜甫の特定の作品や作品群を対象とした研究においても、玄宗に関連する内容がしばしば取り上げられている。例えば、単芳は「従有関曲江諸詩看杜甫对唐玄宗的系念」（『杜甫研究学刊』1997年第3期）において、肅宗時代における杜甫の作品に見られる玄宗への敬慕は、玄宗の知遇に対する感謝と、自身を玄宗朝の旧臣として位置づける意識を反映するものであると指摘している。田馨は「杜甫在朝詩研究」（西南大学修士論文、2010）において、至徳年間から乾元年間にかける左拾遺任官期の杜甫作品における内容および風格の変化は、玄宗・肅宗朝の政治状況に対する杜甫の認識の変容を示すものであると論じている。黄雅莉は「杜甫長安時期的干謁詩探究」（『中国韻文学刊』2017年第31卷第3期）において、玄宗の天宝年間、すなわち長安滞在期における杜甫の作品は、写実主義から一定程度乖離していたことを示していると指摘する。

本論の構成

本論の構成は、以下のようである。

第一章では、玄宗時代（開元：713～741、天宝：742～756）における杜甫の作品に描かれた玄宗像を考察する。とりわけ、杜甫の長安滞在期の作品に注目し、玄宗に対する「称賛」と「批判」という二つの視点を基に、安祿山・史思明の乱（755～763）勃発以前における杜甫の玄宗に対する態度を分析する。

第二章では、肅宗時代（至徳：756～758、乾元：758～760、上元：760～761）における杜甫の作品に描かれた玄宗像に焦点を当てる。この時期の作品においては、安史の乱勃発後の玄宗像が肅宗像と対比されており、その中に玄宗像の変容が見られる。

第三章では、代宗時代（宝応：762～763、広徳：763～764、永泰：765～766、大暦：766～770）における杜甫の作品に描かれた玄宗像を考察対象とする。本章では、肅宗・代宗時代以降の唐王朝の社会状況や杜甫自身の境遇を背景として、杜甫が詩中で玄宗時代への追慕を頻りに示している点に注目する。

終章では、以上に分析した三つの治世における玄宗像の変容を踏まえ、杜甫の忠君意識の段階的な変化を明らかにする。

なお、本論で引用する杜甫の作品の原文および作品の年代については、清の仇兆鰲『杜詩詳注』を底本とし、以下「詳注」と略称する¹²。また、杜甫の作品原文の日本語訓読については、下定雅弘・松原朗『杜甫全詩訳注』を参照した¹³。

¹² 清・仇兆鰲『杜詩詳注』（中華書局、2015）。

¹³ 下定雅弘・松原朗『杜甫全詩訳注』（講談社学術文庫、2016）。

付録 杜甫の略年表

皇帝	年号	西暦	杜甫の略歴
玄宗	先天	712～713	先天元年、杜甫生まれる。
	開元	713～741	開元十九年から開元二十三年まで、晋・呉越に遊歴する。
			開元二十四年、洛陽に帰り、科挙に落第する。
玄宗	開元	713～741	開元二十五年から開元二十八年まで、齊・趙に遊歴する。
			天宝五載、長安に帰る。
			天宝十載、玄宗に「三大礼賦」を献じ、集賢院待制に任じられる。
	天宝	742～756	天宝十四載、右衛率府兵曹参軍に任じられる。十一月、辞官して奉先県に行く。十二月、安史の乱が勃発する。
肃宗	至德	756～758	至德二載五月、肃宗の行在所である鳳翔に至り、左拾遺に任じられる。その後、房琯の罪を弁護したため投獄される。十二月、長安に帰る。
	乾元	758～760	乾元元年、左拾遺として長安に滞在。六月、華州司功参軍に貶せられる。
			乾元二年七月、官を辞する。十二月、蜀の成都に至る。
	上元	760～761	上元年間、成都に定住する。
代宗	宝应	762～763	宝应元年七月、徐知道の乱が勃発し、その影響により梓州に一時滞在する。
	広徳	763～764	広徳年間、梓州・閬州・成都などを行き来する。
	永泰	765～766	永泰元年五月、成都を離れる。
	大暦	766～779	大暦元年から大暦三年正月まで、夔州に滞在する。
			大暦五年（770）冬、襄陽を経て長安に帰る途中で没する。

第1章 杜甫の玄宗時代の作品における玄宗像

1.1 開元の盛世（713～741）と杜甫

712年、唐の玄宗・李隆基が即位し、年号を「先天」と改めた。翌年に「開元」と改元され、この年号は742年に「天宝」と改められるまでの29年間続いた。注目すべきは、杜甫がまさにこの玄宗の即位の年に生まれ、青年期を「開元の治」と称される盛世の中で過ごしたことである。

開元十九年（731）、杜甫は初めて故郷を離れ、晋（現代中国の山西省）および呉越地方（中国の浙江省や江蘇省に相当する）へ旅に出た。開元二十四年（736）には、長安に赴いて科挙を受験したが、及第することはできなかった。その後も各地の旅を続け、天宝五載（746）になって再び長安に戻り、官職に就く機会を求め続けた。

杜甫は若年の頃より詩文の才能により名声を博し、当時の著名な文人である李邕や王翰などに気に入られた。天宝九載（750）に杜甫が著した「進鵬賦表」（『詳注』巻二十四）の中で、「自七歳所綴詩筆、向四十載矣、約千有余篇」（私は七歳より詩を綴り、四十年近くになって、作品は千余篇に及ぶ）と自らの創作歴を語っている。現存する約百首の開元年間の作品から見ると、この時期における杜甫の作品は主に旅先の風景を題材とし、個人的な感情の表出を中心としており、当時の社会階層の実態を描いたものは少ない。また、杜甫は政治の中心地である長安から離れており、官職にも就いていなかったため、これらの作品には玄宗や開元年間の政治情勢に直接言及したものはほとんど見られない。

しかしながら、杜甫の青年期にあたる開元年間の社会状況は、彼の思想の形成に少なからぬ影響を及ぼしたことは疑いようがない。その社会状況を明確に理解するために、筆者は歴史資料の記述を参照しつつ、開元の盛世を回顧した晩年の杜甫の作品を手がかりとして、考察を加えたい。

玄宗の治世である開元年間（713～741）は、唐王朝において経済が最も繁栄した時期の一つである。杜甫は代宗の広徳二年（764）に、開元年間の社会の光景を振り返って、「憶昔二首（昔を憶う二首）」（『詳注』巻十三）の中で次のように詠じている。

憶昔開元全盛日、小邑猶藏万家室 憶う昔開元全盛の日、小邑も猶お蔵す万家の室

稻米流脂粟米白、公私倉廩俱豐実 稻米は脂を流して 粟米白く、公私の倉廩 俱に豐実なり

(かつての開元の盛世を思うと、小さな県城にも一万戸を超える家があった。稲には脂のような光沢があり、粟も白い。官府も庶民も共に穀物を豊かに蓄えた。)

この句には、辺境の小都市ですら人口が密集し、農業生産が豊かであったこと、国家と民間の穀倉がともに満たされていたことが詠じられている。その記述は決して誇張ではなく、史料によって裏付けている。『通典』食貨七には以下のように記載されている¹⁴。

至十三年封泰山、米斗至十三文、青齐谷斗至五文。自後天下無貴物、兩京米斗不至二十文、麵三十二文、絹一匹二百十文……皆有店肆、以工商旅、遠適数千里、不持寸刃。

(開元十三年に泰山で封禪の儀を行った時には、米一斗が十三文まで下がり、青州・齊州の穀物は一斗五文となった。その後は天下に高価な物はなく、兩京では米一斗二十文を超えず、麵は三十二文、絹一匹は二百十文だった……どこにも店が並び、商人や旅人を迎えていた。千里の遠方へ行くにも、刃を携帯する必要すらなかった。)

「自後天下無貴物」の記述からは、農業生産の増大は物価の低下を促し、それにより生計の負担が大幅に軽くなり、社会全体に安居樂業の雰囲気広がったことが読み取れる。さらに「不持寸刃」の一句は、当時の治安の良さと庶民が安定した生活を如実に物語っている。生活の水準が向上するにつれ、庶民の犯罪は明らかに減り、それに伴い唐王朝内部の社会秩序はより安定することとなった。

一方、対外関係においても安定が保たれていた。『新唐書』卷六玄宗本紀によれば、開元二年以降、唐

¹⁴ 唐・杜佑『通典』(中華書局、1988) 卷七食貨七、152 頁。

軍はたびたび吐蕃に対する反撃を行い、いずれも勝利を取めている。また、奚・契丹・突厥など少数民族も、次々に帰順または唐王朝との友好関係を保ち、内外ともに平和な時期を迎えていた。

政治の面では、開元年間の玄宗は姚崇・宋璟・張説・張九齡など、卓越した政治的才能を有する賢臣を宰相に登用し、積極的に政治改革を推進した。また、科挙制度の整備も開元年間の政治改革の一つであった。隋に創設された科挙制度は開元年間に成熟した制度となり、中下層出身者に対して官僚に登用される道を開いた。『通典』によれば、開元時代以降、文学の才能が士人にとって官途に就くための重要な手段とみなされていたことが窺える¹⁵。

思想面においては、則天武後の時代に仏教が隆盛を極め、多くの寺院が建立された状況とは異なり、玄宗の即位後には僧侶の数を削減するなど一連の仏教抑制政策が実施された。その結果、道教と儒教の思想が支配的な地位を占めるようになった。この儒道並存の思想構造は、玄宗時代の思想の基本的枠組みを形成するとともに、士人層の仕官志望を喚起する契機ともなった。

言うまでもなく、儒教は漢代以来、古代中国の基盤思想として位置づけられてきた。「忠」「孝」「礼」などの倫理観念は、封建社会における政治秩序および家族倫理の支柱となり、『論語』子張篇における「学而優則仕」（学問に優れた者は官職に就くべきである）という考えは古代中国の士人階級に広く浸透していた。川合康三も「中国の士の特徴は、このような教養を身に備えているだけでなく、それを手だてとして政治を担当する、というところにある。政治に参加するということは、具体的には『官』、役人になることである」を指摘する¹⁶。

一方、道教については、唐王朝の皇室は「李」姓であったことから、道教の開祖・老子（李耳）を祖先として尊敬しており、道教思想も社会の各層に浸透していた。ただし、真に道教に帰依した者は少数にとどまった。多くの士人にとって、道観に隠遁する目的は信仰よりも、そこを訪れる高官・貴族との人脈を築き、最終的に推挙を得ることにあった。例えば、唐の中宗の治世、盧藏用は終南山に隠遁し、

¹⁵ 『通典』巻十五選舉三に「開元以後、四海晏清、士無賢不肖、恥不以文章達」とある。

¹⁶ 川合康三『中国古典文学彷徨』（研文出版、2008）16頁。

他者の推薦を受けて官職に就いたという。この逸話は「終南捷徑」と称され、後世では隠遁を経て仕官する象徴とされた¹⁷。

このように隠遁を通じて仕官を目指す風潮は、玄宗時代に入ってからさらに顕著となった。玄宗自身が道教を篤く信奉し、方士を宮中に召して丹薬を煉らせたため、道士が皇帝と接触する機会が増加した。その結果、道士と親交のある文人もまた、推挙を受けて仕官の機会を得るようになった。李白が道士呉筠の推薦を受けて登用されたことは、その代表例である¹⁸。

開元年間の杜甫にとって、道士や道教に強く影響を受けた文人（例えば、李白）との交友関係はあったものの、彼の思想に深く根差していたのは、やはり儒教であった。

杜甫は「進鵬賦表」（『詳注』卷二十四）の中で自らを「奉儒守官、未墜素業」（儒を奉じ官職を守り、祖先の業を墜さず）と称しており、その他の詩においても、例えば、「儒生老無成」「干戈送老儒」「乾坤一腐儒」などの言葉を用いて自身を表現しており、儒者としての自覚を示している。彼の祖先には西晋の名将・杜預がおり、曾祖父の杜依芸は監察御史、祖父の杜審言は修文館直学士を務めた人物である。このような名門に生まれたことから、杜甫は仕官への強い期待を抱いていた。盛唐の文人にとって、遊歴は官職を得るための不可欠な手段であった¹⁹。杜甫も例外ではない。そして彼は十九歳以降、晋・呉越・斉趙・梁宋など中国各地を遊歴し、各地の官僚や名士と交際し、自らの存在を広く知らせることによって、推薦を得て仕官の道を開こうとした。

以上に述べたように、開元年間の唐王朝は国力が強大で、民衆は安定した生活を享受していた。このような社会状況から見ると、開元年間は民衆にとって理想的な時代であったと言える。一方、統治者であった玄宗は、優秀な人材を登用し、とりわけ文人の抜擢を重視した。その政策の実施は、杜甫を含む

¹⁷ 唐・劉肅『大唐新語』（中華書局、1984）卷十隱逸第二十二を参照。

¹⁸ 『旧唐書』卷一百九十下呉筠伝に「既而玄宗詔筠赴京師、筠荐之于朝、遣使召之、与筠俱待詔翰林」とある。

¹⁹ 喬象鍾、陳鉄民編『唐代文学史』（人民文学出版社、1995）483頁を参照。

士人層の間において、玄宗の明君としてのイメージを確立させた。こうした明君を輔佐して自らの政治的理想を実現することは、当時の士人たちの願望であったに違いない。さらに、杜甫は儒家思想の影響を受けると同時に、代々官職に就く家に生まれたことを背景に、遊歴を通じて自らの名声を高め、推薦を受けて仕官の機会を得ようとした。途中、科挙に落第するという挫折を経験したものの、彼の仕官への熱意は揺らぐことはなかった。そして杜甫は天宝五載（746）に長安へ赴き、仕官を目指す新たな段階に踏み出した。

1.2 杜甫の天宝年間（742～756）の作品における玄宗への賛辞

儒家思想の深い影響を受けた杜甫は、官職に就くことで自らの政治理想を実現することを強く願っていた。天宝五載（746）、各地を放浪していた杜甫は長安に戻り、翌年（747）には朝廷が主催した制挙（皇帝により実施された特別試験）を受験した。しかし当時の宰相李林甫は、有能な人材が登用されることで自身の権勢が脅かされることを恐れ、玄宗に民間に優れた人材は残っていないと報告したため、この試験では合格者を一人も出さないという異例の事態が生じた。杜甫をはじめ、元結ら当時の優秀な文人たちも落第を余儀なくされたのである。

杜甫は「奉贈鮮于京兆二十韻（せん とう けいちよう 鮮于京兆に贈り奉る二十韻）」（『詳注』巻二）の中で、李林甫がこの試験を操作したことに対する憤懣を次のように詠じている。

破胆遭前政、陰謀独秉鈞	破胆前政の、陰謀独り鈞を秉るに遭う
微生霑忌刻、万事益酸辛	微生 忌刻に霑い、万事 益々酸辛たり

（前任の宰相が陰謀を用いて権力を独占していた状況は、胆をつぶすものであった。私は嫉妬によって官に就くことはできず、何事もますます辛いことになった。）

「前政」とは李林甫を指す。『詳注』によれば、この詩は天宝十一載（752）十二月、李林甫が失脚し楊国忠が宰相となった時期に作られたものである。杜甫は天宝六載（747）に李林甫の嫉妬によって制挙に落第した苦い経験を回想しているという。

一方、天宝六載の制挙の落第にもかかわらず、杜甫は天宝十四載（755）に河西尉に任じられるまでの約十年間、一貫して仕官への志向を持ち続けていた。天宝六載の「奉贈韋左丞丈二十二韻（い き じようじよう 韋左丞 丈に贈り奉る二十二韻）」（『詳注』巻一）において、杜甫は「致君堯舜上、再使風俗淳（君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳からしめんと）」の政治への抱負を韋済に表明していた。また天宝末年の作品において、例えば、天宝十三載（754）の「贈陳二補闕（ちん じ ぼけつ 陳二補闕に贈る）」（『詳注』巻三）において、杜

甫は「自到青冥裏、休看白髮生（^{おのずか} 自^{せいめい} ら青冥^{うち}の裏^{いた}に到れば、看るを休めよ白髮^{はくはつ}の生ずるを）」との句を通じて、友人に高齢となっても志を捨てないよう励ましつつ、自らの仕官への情熱も表しているものだと考える。

このように仕官への強い情熱を抱いていた杜甫は、長安滞在期（746～755）において、二つの方略を用いて仕官の道を探った。

第一に、杜甫は「贈韋左丞丈濟（韋左丞丈濟に贈る）」（『詳注』巻二）、「贈翰林張四學士垺（翰林の張四學士垺に贈る）」「奉贈鮮于京兆二十韻」「投贈哥舒開府翰二十韻（哥舒開府翰に投贈す二十韻）」（全て『詳注』巻三）など、朝廷の重臣を対象とした一連の作品を作った。これらの作品には共通して、まず彼らの才能と栄達を称え、次に杜甫自身の抱負を述べ、最後に婉曲に引き立てを依頼するという構造が見られる。

第二に、杜甫は則天武后後に創設された「延恩匭」（情報を収集した窓口）を利用し、天寶十載（751）に「朝獻太清宮賦」「朝享太廟賦」「有事於南郊賦」（総称「三大礼賦」）を、続く天寶十二載（753）には「封西岳賦」を献上した。前章で述べたように、玄宗は文芸を好み、李白ら文人を破格の抜擢したという前例があった。杜甫が賦を献上したのも、自らの文学的才能を皇帝に認められようとしたためであった。

これらの作品において、杜甫が玄宗とその治世を称賛する表現には誇張的傾向が顕著に認められる。例えば、「有事於南郊賦」に曰く²⁰、

蓋九五之後、人人自以遭唐虞。四十年来、家家自以為稷卨。

（玄宗の即位後の四十年間にわたり、民衆は堯舜のような明君に統治されていると思い、臣下たちも舜の治世の賢臣・稷^{しよく}と契^{けい}のような存在だと自負している。）

²⁰ 『欽定全唐文』（匯文書局印行）卷三五九。

ここで「四十年来」とあるのは、玄宗が即位した 712 年から杜甫の賦を献上した 751 年までの治世を指す。杜甫は玄宗を伝説の明君「堯」に、大臣たちを上古の賢臣「稷」と「高（契）」に喩える。

このような賛辞は姚崇・張説・張九齡ら有能な人材が登用され、理想的な時代であった開元年間（712～742）を描くのであれば、適切であろう。しかしながら天宝年間の政治状況は全く異なった。前述のように、杜甫は宰相李林甫の奸邪を「陰謀獨秉鈞」（『奉贈鮮于京兆二十韻』）と非難している。さらに、外戚として権勢を振るった楊国忠に対しては、杜甫も「麗人行」（『詳注』巻二）でその豪奢な生活と礼法を無視する行為を批判している。

このように、杜甫が天宝年間における李林甫や楊国忠などの奸臣の存在を認識していたにもかかわらず、賦の中では君臣ともに賢明であると称賛しているのは、意図的な美化と言えるだろう。

さらに例を挙げれば、杜甫が哥舒翰に献じた「投贈哥舒開府翰二十韻（かじょうかいふかん とうぞう 哥舒開府翰に投贈す二十韻）」（『詳注』巻三）がある。当時、哥舒翰は玄宗に重用され、西北の辺境の兵権を掌握していた。杜甫は、天宝八載（749）に哥舒翰が吐蕃の石堡城を占領した功績を称賛することで、彼の推薦を受けようとしたのである。

君王自神武、駕馭必英雄 君王 みづか 自ら神武、がぎょ 駕馭するは 必ず英雄なり

（君主は自ら神のように武勇を持ち、そのもとに統御されるのは必ず英雄である。）

日月低秦樹、乾坤繞漢宮 じつげつ しんじゅ た けんこん 日月 秦樹に低れ、乾坤 漢宮を繞る

（日月は長安を照らし、天地は都城をめぐって運行している。）

「君王自神武」の句において、哥舒翰を石堡城戦役の統帥に任命した玄宗は英明な君主と描かれている。「日月低秦樹」の句には、杜甫は天地が長安を中心に回転するという比喻をもって、石堡城を落城さ

せた結果、国土の拡大を実現したことを讃える。

しかしながら、後世の評価において、石堡城戦役の「勝利」に対しては批判的な見解が多くを占めている。『資治通鑑』によれば、玄宗が当時隴右節度使であった王忠嗣に石堡城を攻略することを命じた際、王忠嗣は地勢が険しい上に、大規模な吐蕃守備隊があることを理由に、「所得不如所亡」（獲得する利益が損失に比べて見合わない）と反対した²¹。しかし、玄宗はこの反対意見を受け入れなかった。天宝八載（749）、玄宗の命令により哥舒翰は約六万人の軍隊を率いて石堡城を攻略させ、最終的に成功したものの、王忠嗣の予測通り唐軍は数万の兵力を失う損害を被った²²。

この詩に関しては、『詳注』に顧宸の「此詩称美、未免太過」（この詩の称賛は過度であろう）という批判の見解が引用されている²³。すなわち、これは杜甫の戦争に対する態度を非難するものである。

しかし実際には、杜甫の戦争に対する本質的態度はあくまで嫌悪であった。次節で詳述するように、天宝年間に詠じられた「前出塞九首」「兵車行」（全て『詳注』巻三）「後出塞五首」（『詳注』巻四）などの作品において、彼は唐王朝による周辺諸国への度重なる戦争を非難している。これらの作品では、戦費にあてるための租税徴収や強制的な徴兵などの戦争が庶民にもたらした苦難が描かれている。しかし、その本心は権力者に推挙を求める作品に述べられず、かえって権力者への賛辞へと化していた。この原因は仕官への願望と密接に関連していると考ええる。

杜甫が官職に熱望したのは、前章で述べた儒家思想に起因するのに加え、天宝末年における彼の困窮した生活とも深く関わっていた。現存する作品からは杜甫の生活の苦しさが窺われる。例えば「橋陵詩三十韻因呈鼎内諸官（橋陵詩三十韻、因りて鼎内の諸官に呈す）」（『詳注』巻三）では「窮愁醉不醒（窮愁酔いて醒めず）」、「奉贈鮮于京兆二十韻」（『詳注』巻三）では「有儒愁餓死（儒有り餓死せんこ

²¹ 『資治通鑑』巻二百十六唐紀三十一に「上欲使王忠嗣攻吐蕃石堡城。忠嗣上言『石堡險固、吐蕃拳固守之、今頓兵其下、非殺數萬人不能克。臣恐所得不如所亡、不如且厲兵秣馬、俟其有釁、然後取之』上意不快」とある。

²² 『資治通鑑』巻二百十六唐紀三十二に「上命隴右節度使哥舒翰帥隴右、河西及突厥阿布思兵、益以朔方、河東兵、凡六萬三千、攻吐蕃石堡城……獲吐蕃鉄刀悉諾羅等四百人、唐士卒死者數萬、果如王忠嗣之言」とある。

²³ 『詳注』巻三、167頁。

とを愁う)」と詠じている。まさに「官定後戯贈（官定^{かんさだ}まりて後戯^{のちたわむ}れに贈る）」（『詳注』巻三）では「耽酒須微禄（酒に耽りて微禄^{びろく}を^ま須ち）」というように、杜甫は官職による俸禄なしには基本的な生計さえ維持できない状況に陥った。このような経済的困窮が、杜甫の仕官への切迫感を一層強めたことは疑いない。

陳怡焮は、仕官の願望により玄宗や権臣への誇張した賛辞を「杜甫急於做官的庸俗考慮」（官職を得んとする焦りから生まれた世俗的行為）と評している²⁴。しかし、「庸俗」という評価より、むしろ錢謙益による「当時不得已而姑為權宜之計，後世宜諒其苦心」（当時の賛辞はやむを得ないものであり、後世はその苦衷を察すべきだ）という解釈の方²⁵が適切であると考ええる。錢謙益が指摘するように、これらの仕官を目指した作品は、杜甫の本心を表したものとは言い難い。したがって、後世の我々は、杜甫に対して厳しい批判を加えるのは見当違いではないだろうか。

上述の杜甫の仕官を目指した作品は天宝年間の玄宗像や政治状況を客観的に描かないものの、当時盛んとなった「頌聖文化」を反映している。

天宝年間、朝廷は六回にわたり儀式を催し、莫大な経費を投入し、玄宗に対する尊号を追加した²⁶。李林甫や楊国忠をはじめとする大臣たちも、玄宗への称賛によって権勢を得た。人材選抜の面では、受験生が権力者に賄賂を贈るなどの不正行為が存在したのみならず、詩賦試験において権力者への賛辞を詩賦の内容とすることも増加していた²⁷。

さらに、天宝年間において科挙を受験せず権力者の推挙により官職を得る文人が急増した。この現象の背景には、唐代における経済制度の均田制の崩壊があった²⁸。人口増加と権力者が土地を独占することにより、多くの民衆が経済基盤である土地を失ったにもかかわらず、租税の徴収は免除されなかった。

²⁴ 陳怡焮『杜甫評伝』（北京大学出版社、2003）165 頁。

²⁵ 『詳注』巻二、125 頁。

²⁶ 『旧唐書』巻九本紀第九玄宗下を参照。

²⁷ 傅璇琮『唐代科挙与文学』（中華書局、2020）第十四章を参照。

²⁸ 吳錚強「唐宋時期科挙制度的变革与社会結構之演变」（『社会学研究』2008 年第 2 期）152 頁を参照。

その結果、下層の文人たちは科挙受験に多額の費用を負担できなくなった。科挙以外で皇帝の目に留まり官職を得るためには、「頌聖」の作品、すなわち太平を謳歌して権力者の功績を讃える作品を献上するほかなかったのである。

以上の現象は天宝年間の「頌聖文化」の一端に過ぎないが、玄宗は自分の功績や徳行が称賛されることに耽り、官吏登用制度において有能者を任用するという原則から逸脱した様子が窺われる。

1.3 杜甫の天宝年間（742～756）の作品における玄宗への批判

天宝七載（748）、杜甫は「奉贈韋左丞丈二十二韻（韋左丞丈に贈り奉る二十二韻）」（『詳注』巻二）において「致君堯舜上、再使風俗淳（君を堯舜の上に致す、再び風俗をして淳^{あつ}からしめんと）」という政治的理想を表明した。『詳注』によれば、この句は杜甫の志が「君主を匡正し、風俗を純朴にする」ことにあると指摘している²⁹。つまり、当時の君主が正道から逸脱したということを反映している。

さらに、杜甫は天宝十三載（754）の「上韋左相二十韻（韋左相に上る二十韻）」（『詳注』巻三）において再び「廟堂知至理、風俗尽還淳（廟堂 至理を知り、風俗 尽く淳に還る）」と詠じる。本詩は韋見素が同中書門下平章事に昇進したことを祝う目的で献じられたものである。「風俗 尽く淳に還る」の句は、韋見素の政治的才能を称揚し、当時の風俗を「淳」という状態に回復させた功績を賛美したものである。この詩には仕官を目指した意図があるため、韋見素への称賛には一定の誇張が認められる。しかし、「淳」である時代こそが、杜甫が望んでいたものであることが窺われる。

杜甫が理想とした「淳」である時代とは、太宗の「貞観の治」（626～649）のようなものであると考えられる。このことは天宝十載（751）ごろに詠じられた「同諸公登慈恩寺塔（諸公の慈恩寺の塔に登るに同ず）」（『詳注』巻二）において明らかとなる。

秦山忽破碎、涇渭不可求	秦山 忽ち破碎 ^{は さい} し、涇渭 ^{けい い} 求む可 ^べ からず
俯視但一氣、焉能辨皇州	俯視すれば但だ一氣のみ、焉 ^{いずくん} ぞ能く皇州を弁ぜん
廻首叫虞舜、蒼梧雲正愁	首を廻 ^{めぐ} らして 虞舜 ^{ぐ しゅん} に叫 ^{さけ} べば、蒼梧 ^{そう ぶ} 雲正に愁う
惜哉瑤池飲、日晏崑崙丘	惜しいかな 瑤池 ^{よう ち} の飲、日は晏 ^く る 崑崙 ^{こん ろん} の丘
黃鵠去不息、哀鳴何所投	黃鵠 ^{こう かく} 去りて息 ^{やす} まず、哀鳴 ^{あい めい} して何くに投ずる所ぞ

（終南山は忽ち碎け、涇水と渭水との清濁さえも見分けることができなかった。俯瞰すれば、全て

²⁹ 『詳注』巻一、65 頁に「自謂四句、欲正君善俗」とある。

はただおぼろに見え、長安城の所在すら判別できない。振り返って明君たる虞舜に呼びかけると、蒼梧の地にあるその陵墓の上には、雲が憂いを帯びていた。残念なことだ、かつて周の穆王は西王母とともに瑤池で宴を張り、崑崙山には日が暮れたという。黄鵠は次々と飛び去り、悲しげに鳴くばかりで身を寄せる先も知れぬまま。)

冒頭の「秦山」「涇渭」「皇州」についての描写は、朝廷の内部が乱れ、忠臣と奸臣の区別がつかなくなったとの政治情勢を暗喩する。「廻首叫虞舜」の句は、蒼梧に葬られた舜を懷古することを通じ、堯舜のような明君と評される太宗への敬慕を表している。この句には太宗の治世への憧れが表明されると同時に、現在の玄宗の治世への失望も含むものであると思われる。「惜哉瑤池飲」の句には、玄宗と楊貴妃が驪山の温泉宮で享樂に耽る様子が描かれている。それに対し、最後の句では、皇帝の信任を失う賢臣たち（当時、張九齡ら有能な大臣が左遷されていた）が、去りゆく黄鵠に喩えられる。このような対比を通じて、杜甫自身の「どこへ行けばよいのか」という不安感も詩に込められているのである。

以上の「同諸公登慈恩寺塔」に関する分析から、杜甫が開元年間から天宝年間にかけての政治情勢の悪化を自覚していたことが窺われる。このような政治情勢を背景として、杜甫の作品における玄宗治世への批判は二つの対象に焦点を絞っている。

第一、吐蕃などの周辺諸国に対する領土拡張の政策

第二、外戚の権力独占による天宝十三載（754）水害の被害の拡大

以下、この二点を分析してゆく。

一 領土拡張政策について

前章で述べたように、杜甫は天宝十三載（754）の仕官を目指した「投贈哥舒開府翰二十韻（哥舒開府翰に投贈す二十韻）」（『詳注』巻三）において、天宝八載（749）の石堡城の戦いの勝利により玄宗が吐蕃からその石堡城を奪うとの功績を称賛している。しかし一方で、吐蕃との戦いの勃発時すなわち天宝

八載に、杜甫は「兵車行」と「前出塞九首」(『詳注』巻二)において、玄宗の領土拡張の軍事政策への強い批判を次のように詠じている。「兵車行」における「武皇」は、唐代の文人が玄宗を指す慣用表現である。

辺庭流血成海水、武皇開辺意未已 辺庭の流血 海水を成すも、武皇^{ぶこう}辺を開きて意未だ^や已まず

(辺境では流血が海のように広がったが、玄宗の領土拡張の政策はいまだ止むことがなかった。)

君已富土境、開辺一何多 君已に土境^{どきょう}富むに、辺を開くこと一に何ぞ多き

(君はすでに十分な国土を有しているのに、どうしてなお辺境を開拓しようとするのか。)

「前出塞九首・其一」ではある兵士の口を借りて君主に「国土は極めて広大なのに、なぜさらに領土拡張を求めるのか」と詰問している。

両詩に共通する「開辺」(領土拡張)という句は、兵士の血が海水のように流れる戦場の悲惨な光景をもたらした玄宗の無理な領土拡張の政策を糾弾している。

さらに、「前出塞」という詩題そのものが戦争に対する批判を内包している。明の胡夏客の見解によると、杜甫は出兵を意味する「出師」を用いず「出塞」と題したことは、玄宗が主導した吐蕃との戦いには正当性がないことを暴露することにあつた³⁰。

その批判は儒家の戦争観に根ざしている。孟子は「春秋には義戦はない…征とは上が下を討つことであり、対等な敵国を征伐しない」³¹と述べ、戦争の正当性を、「上」(統治者)が「下」(秩序を破壊する反乱勢力)に対する反乱鎮圧の軍事行動に限定した。天宝年間の吐蕃との戦いは、覇権の争いであるため、孟子の「敵国を征伐せず」という思想に反し、儒家が認める「義戦」ではない。なお、杜甫の政治

³⁰ 『詳注』巻二、104 頁に「胡夏客曰、前后出塞詩題、不言出師而言出塞、師出无名、为国諱也」とある。

³¹ 『孟子』尽心章句下に「孟子曰、春秋無義戦。彼善于此、則有之矣。征者、上伐下也、敵国不相征也」とある。

的理想は「仁政」の実現にあった。孟子の思想において「仁政」とは「保民而王」（君主は民衆の利益に基づく政策を実施する）を意味する³²。そして大量の兵士を犠牲にして勝利を得た吐蕃との戦いは、もちろん儒家思想とは相容れない。

さらに注目すべきは、本来、兵役を負担した民衆には租税免除が適用されるとの点である。しかし「兵車行」での「県官急索租、租税従何出」（県官急に租を索むるも、租税何くより出でん）によれば、戦時の民衆は兵役のみならず租税も強いられたのである。この重税の一部は軍費に充てられ、残りは玄宗や貴族の奢侈な生活を支える源となったと考える。なお、「租税従何出」の句に反映された民衆が租税を納められなかったということは、前章で述べた天宝年間の深刻な経済危機とも密接に関連している。当時、貴族階級が庶民の土地を独占した（土地兼併）結果、均田制は崩壊してしまった。それにもかかわらず、朝廷は土地の面積ではなく人数を基準とした「租庸調制」という人頭税を継続していた³³。土地を失った民衆たちが以前と同じ租税を強いられたことは、天宝年間の経済制度の大きな欠陥であった。

二 外戚の権力独占について

天宝十三載（754）の秋、関中地区は二ヶ月以上に及ぶ異常な大雨に見舞われ、大規模な水害が発生した。杜甫は「秋雨嘆三首（秋雨の嘆き三首）」（『詳注』巻三）で以下のように詠じる。

雨中百草秋爛死，階下決明顏色鮮 雨中百草 秋に爛死するも、階下の決明顏色 鮮かなり

（秋の雨が降り続き、草花は全て枯れたが、階段の下に生える甘菊だけは、なお鮮やかである。）

持続的な大雨は農業生産に大きな打撃を与え、農地が水に沈み、「禾頭生耳黍穗黑（禾頭耳を生じて黍穗黒く）」というように穀物が腐った。杜甫は飢饉に苦しむ関中地区の民衆を心配し、「九日寄岑参（九

³² 『孟子』梁惠王章句上に「孟子曰、保民而王、莫之能御也」とある。

³³ 李錦繡『唐代財政史稿』第二冊（北京大学出版社、2001）48頁を参照。

日岑参に寄す)」（『詳注』巻三）において以下のように嘆く。

吁嗟乎蒼生、稼穡不可救　　^{あ　あ　そうせい　かしよく}吁嗟乎蒼生、稼穡 すれども救う可からず

（水害に苦しむ民衆は作物を植えても、彼ら自身を救えない。）

食糧不足により長安の米価も暴騰した。「秋雨嘆三首」の中の「城中斗米換衾裯（城中は斗米衾裯^{と　べいきんちゆう}に換う）」は、水害が長安の民衆に与えた悪影響を如実に物語っている。

しかし天災以上に深刻だったのは人災である。『資治通鑑』によれば、宰相の楊国忠は功績を上げようとするために、「雨は多いが、農作物には悪影響がない」と奏上し、房琯ら他の大臣たちが水害の実情を報告するのを妨げた³⁴。玄宗は楊国忠を信じたばかりにこの嘘に騙され、その結果、朝廷の救済措置が遅れ、被害がさらに拡大した。

このような状況に直面し、杜甫は怒りを込めて「九日寄岑参」で次のように詠じる。

安得誅雲師、疇能補天漏　　^{いづくん　うん　し　ちゆう　たれ　よ　おぎな}安　ぞ雲師を誅するを得んや、疇か能く天の漏るを補わんや

（雨を司る雲の神をどう罰すればいいというのか。空の穴を塞いで雨を止められる者はいるのだろうか。）

「雲師」は楊国忠を指す。奸臣楊国忠は太陽を覆う雲の如く、水害の実情を隠したのである。「雲師を誅せん」という句は、杜甫の奸臣を除きたいという強い願望を示す。

水害の実情を把握していなかった玄宗に対し、杜甫は空に穴があるという比喻を用いて「秋雨嘆三首」其三で君主の過失を批判した。

³⁴ 『資治通鑑』巻二百一十七唐紀三十一に「国忠取禾之善者献之、曰、『雨虽多，不害稼也』上以為然。扶風太守房琯言所部水災、国忠使御史推之」とある。

秋来未曾見白日 秋来未だ曾て白日を見ざれば

泥汚后土何時乾 泥は后土を汚して何れの時に乾かん

(秋になってから、太陽が出たことがない。この泥まみれの大地は、いつになれば乾くんだろう。)

「白日を見ず」は君主（玄宗）が奸臣に騙されているを暗喩する。次の句は、楊国忠を中心とする朝廷が泥沼のように汚れたとの痛烈な皮肉である³⁵。杜甫は『淮南子』巻六の「女媧が天を補う」との神話を逆用し、玄宗はもはや天下を治める能力を喪失したことを暗喩している。「泥汚后土何時乾」の句は『左伝』昭公二十五年の災異説を用い、楊国忠の乱政は天理に背き、天罰としての水害を招いたことを指す。

朝廷が時に乗じて救済できなかった原因は、紛れもなく楊国忠による虚偽の報告にあった。これは天宝年間における外戚楊国忠の権力独占という深刻な政治問題を浮き彫りにする。開元年間に姚崇・宋璟・張九齡ら有能な宰相を登用して国を治めた時代とは対照的に、天宝末年に楊国忠のような奸臣に政務を委ねたことは、玄宗の人事上の重大な失策であった。玄宗が楊国忠を重用した理由は、彼が有能であったためではなく、楊貴妃の従兄であるという身分、及び前任の宰相李林甫と同様、皇帝にへつらうのが得意だったからであった。才能がない外戚の重用の結果、「賞罰に規律なく、陰陽の調和を失う」という政局の混乱をもたらした³⁶。

以上のように、杜甫の天宝年間における作品群を見ると、仕官を目的とした作品が主流を占め、玄宗への批判は比較的少数である。「兵車行」や「前出塞九首」は樂府詩という形式ゆえに批判が直接的であるが、本章で分析した他の作品における批判的意図が果たして杜甫の本心を表すものかどうかについて

³⁵ 『詳注』巻三、181～188頁を参照。

³⁶ 『資治通鑑』巻二百一十七唐紀三十一に「自陛下以權仮宰相，賞罰無章，陰陽失度」とある。

は、依然として議論の余地がある。総じていえば、安史の乱の際に作れた「三吏三別」のような社会批判詩と比べると、この時期の杜甫の作品における批判の表現はまだ婉曲的だと言える。この原因は、杜甫が当時、官職を切実に求めていることにあるだろう。

とはいえ、玄宗の治世の最後の年すなわち天宝十四載（755）、杜甫の創作は転機を迎えた。この年、杜甫は河西尉に任命された後、右衛率府兵曹（武器管理の閑職）へ異動となるが、このような微官で「君を堯舜に致す」（「奉贈韋左丞丈二十二韻」）という政治的理想を到底実現できなかった。そして杜甫は官職を辞して長安を離れ、奉先県の家族のもとを訪れる途中、民衆の悲惨な実態を目の当たりにした。この体験から生まれた「自京赴奉先県詠懷五百字（京より奉先県に赴く詠懷五百字）」（『詳注』巻四）は、杜甫が長安滞在期に官職を求めることを目指した作品とは一線を画し、社会批判詩の萌芽として位置付けられている。この詩が完成した直後、安史の乱が突如勃発し、玄宗の治世が終わった。次節ではこの詩を手がかりとして、開元年間から天宝年間に至る杜甫の作品における玄宗像の変容を分析する。

1.4 「自京赴奉先県詠懷五百字」における天宝末年の玄宗像と杜甫

天宝十四載（755）、杜甫は右衛率府兵曹參軍^{うゑそつふへいそうきんぐん}の職を辞任した後、仕官への熱意がさめていた。十月頃、杜甫は奉先県^{ほうせんけん}に滞在する家族を訪れるため長安を離れ、その途上で「自京赴奉先県詠懷五百字（京より奉先県に赴く詠懷^{えいかい}五百字）」（『詳注』巻四）を詠じた。

官職を得ることを目指して高官への賛辞に満ちた「干謁^{かんえつ}」の作品とは大きく異なり、この詩は「詠懷」の作品として、杜甫の心中にある思いを露わにしたものである。杜甫は「兵車行」や「前出塞九首」などの作品において、すでに戦争による民衆の苦難に言及していたが、それらの描写は多く伝聞に基づくものであった。長安に十年滞在した彼は、辺境の戦場に赴いた経験がなかったのである。しかし、「詠懷五百字」に記録された民衆の惨状は、杜甫が奉先県に赴く途中で目の当たりにしたものである。

かつて官職を求めていたが後に自ら辞官したという心境の変化とともに、杜甫には権力者の歓心を買うために本心を偽る必要がなくなった。加えて、都城の長安から地方の奉先県への移動は、地方の民衆の生活を直視させることとなった。この内面的解放と外的視野の拡大との二重の変化は、「詠懷五百字」を杜甫の創作生涯における重要な転換期の作たらしめたのである。

本詩の構成は大きく三つの部分に分けられる。まず、杜甫は長安に滞在した十年間の経験を振り返り、自らの政治的理想を述べ、仕官と隠逸との矛盾を示している。次に、杜甫は長安における支配階級が享樂に耽る場面を描く一方で、その背後にある社会危機を鋭く指摘している。最後、帰省の途上で目の当たりにした民衆の苦しみを描き、唐王朝の前途に対する深い憂慮を表している。これらの三部分は、長安内外の対照的な社会状況と杜甫の長安滞在の経験との二重の視点からなり、杜甫の天宝時代に対する総括的省察と見なすことができるだろう。以下、社会と個人の二つの側面からそれぞれ分析してゆく。

一 儒家の政治的思想に反する天宝年間

1.3 節で論じたように、杜甫の天宝年間の玄宗に対する批判は、主に領土拡張の軍事政策と外戚の権力独占を対象としており、これらも「詠懷五百字」において言及されている。

況聞内金盤、尽在衛霍室　　^{いわん}況^{だい}や聞^{きん}く内^{ばん}の金盤、^{ことごと}尽^{えいかく}く衛霍の室に在りと

(それに聞くとところによると、宮中にあった金盤や宝物が、尽く外戚の家へ移されたという。)

ここで用いられる「衛霍」は漢代の^{えいせい}衛青と^{かくこう}霍光を指す。衛子夫が漢武帝の皇后となったために衛氏と霍氏が栄達し、霍光が^{しょうゆうおうりゅうが}昌邑王劉賀を廃立したことがあった。このことから、「衛霍」とは外戚の強大な権力を象徴する。すなわち、詩中では、「衛霍」のように楊国忠が権力を独占して唐王朝の基盤を揺るがす危局に対する杜甫の不安が表明されている。「尽く」の二字は特に鋭く、玄宗が享樂に耽り、政務を外戚に依頼する天宝末年の危局を暴露する。1.3 節で述べたように、天宝十三載(754)、楊国忠が水害の実情を隠した結果、被害がさらに拡大したことは、まさに外戚が権力を独占したことの弊害であった。

默思失業徒、因念遠戍卒　　^{もく}默して失業の徒を思い、^よ因りて^{えんじゆ}遠戍の卒^{そつ}を^{おも}う

(土地を失った農民のことを思い、さらに遠く国境を守る兵士たちのことを思う。)

玄宗時代は領土拡張の政策を止めず、戦乱が頻発していたため、民衆は租税と兵役の二重の負担を押し付けられた。ここでの「失業の徒」とは、均田制の崩壊によって貴族に耕地を奪われた流民を指す。彼らは耕作による収入を得られないにもかかわらず租税の納入を強制され、或いは「遠戍の卒」(兵士)として過酷な戦場に派遣された。

1.3 節の「兵車行」の分析において、筆者は当時の租税が一方で軍費に充てられ、他方で支配階級へ献上される構造を指摘した。本詩においても杜甫はこの点を次のように強く批判している。

彤庭所分帛、本自寒女出　　^{とうてい}彤庭にて分かつ所の帛は、^も本と^{かんじよ}寒女より^い出ず

鞭撻其夫家、聚斂貢城闕　　^{べんたつ}其の夫家を鞭撻し、^{しゅうえん}聚斂して^{じょうけつ}城闕^{みつ}に貢ぐ

(賜物としての絹帛は、もともと下層の女性たちの手で織られたものである。しかし、役人たちはその家族を鞭打ち、絹帛を奪い取り、長安城の君臣に献上した。)

杜甫が実現を願った儒家の「仁政」とは、朝廷が民衆を養い、生活水準を向上させることを目指している。ところが天宝年間の現実とは全く逆で、底辺の民衆が支配階級の享楽を支えることとなっていた。杜甫は詩中に社会状況を「朱門酒肉臭、路有凍死骨（朱門に酒肉臭し、路に凍死の骨有り）」と詠じ、それに対し、「仁者宜戰慄（仁者宜く戦慄すべし）」と悲嘆していたのであった。

二 杜甫における「仕」と「隠」との内的矛盾

「詠懷五百字」の前半において、杜甫は長安に十年間滞在し、自らの政治的理想が果たさなかった経験を回顧している。長安における不遇は杜甫を失望させ、天宝末年における社会状況も彼に憂慮を抱かせた。彼は詩中で自らの心境を以下のように詠じる。

窮年憂黎元、嘆息腸内熱 窮年 黎元を憂い、嘆息して腸の内熱し

(老境に入った私は民衆の生活を案じている。彼らの苦難を思うと、心が焼けるように焦る。)

「窮年」は老人のこと、即ち杜甫自身を指す。「黎元」は民衆を意味する。ここには杜甫の民衆の苦境を案じる思いが吐露されている。しかし、自らは重用されず、民衆が困窮に陥る社会状況に直面しながらも、杜甫は自身の処世について次のように詠じる。

非無江海志、蕭灑送日月 江海の志の、蕭灑として日月を送らんとすること無きに非ず

生逢堯舜君、不忍便永訣 生まれて堯舜の君に逢うに、便ち永訣するに忍びず

(私は、江海の間に隠遁して閑適な生活を送りたいと願わないわけではない。しかし、堯舜のごと

き明君にめぐり逢ったため、彼のもとを離れるに忍びないのである。)

杜甫は江海の間に隠遁する志を抱いていたが、玄宗を堯舜のような明君と見なししていたため、官界から離れるに至らなかったという。

杜甫の政治的理想はまさに「奉贈韋左丞丈二十二韻」(『詳注』巻一)における「致君堯舜上、再使風俗淳(君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳からしめんと)」ということであった。彼の理想的な君主像は、「堯舜」という伝説の明君であったことは疑いようがない。また、1.3節で述べたように、彼も「同諸公登慈恩寺塔」(『詳注』巻二)において「廻首叫虞舜、蒼梧雲正愁(首を廻らして虞舜に叫べば、蒼梧雲正に愁う)」と詠じている。ここでは太宗を堯舜のような理想的な明君に等しい存在と見なし、唐王朝が太宗の治世へと回帰することを願っていたのである。

しかしながら、杜甫が作品による描き出した玄宗の天宝年間は、いずれも堯舜と太宗の治世とは程遠いものであった。ここで杜甫がなぜ玄宗を「堯舜君」と呼んだのかは、後世において議論の余地がある。筆者は蕭滌非と同じく、杜甫は玄宗の失政を認識しつつも、なお玄宗が開元年間のように国を治めることを期待していたと考える³⁷。その期待を持っていたため、彼は仕官すべきか隠遁すべきかという矛盾した心境に陥ったのである。

『論語』において孔子は、君主の「有道」・「無道」と臣下の「仕」・「隠」の選択との関連性を繰り返し説いている。例えば『論語』衛霊公第十五には以下の記述がある。

子曰「邦有道則仕。邦无道則可卷而懷之。」

(子曰く、邦に道有れば、則ち仕う。邦に道無ければ、則ち巻きて之を懷く)

³⁷ 蕭滌非『杜甫全集校注』(人民文学出版社、2014) 673 頁に「杜甫以堯、舜喻比玄宗，不特空言頌美，玄宗初期曾出現『開元之治』、認為玄宗政治上仍大有可為」という。

「卷而懷之」とは、国に道がない場合には、仕官の志を胸に納めて隠遁することを意味する。また、『論語』^{たいはく}泰伯第八ではより詳しくこのことを説く。

子曰「危邦不入、乱邦不居。天下有道則見、無道則隱。」

(子曰く、^{きほう}危邦には入らず、^{らんぽう}乱邦には居らず。天下に道あれば則ち^{あらわ}見れ、道なければ則ち^{かく}隠る。)

これは士人が有道の君主を補佐すべきだという儒家思想を明示している。もし君主の行為が正道から逸脱した場合、士人はそのような君主に従うべきではなく、身を引くべきだというものである。

孔子は君主の「有道」か「無道」かに応じて、「仕」か「隠」かを選択すべきだと説いたが、杜甫は思い切って決断できなかった。

一方、この詩を詠じた時、杜甫はすでに官職を辞任し、政治の中枢たる長安を離れていた。彼は「独恥事干謁(独り^{かんまつ}干謁を事とするを恥ず)」と述べ、かつて官職を得るために権力者に作品を献じて過度に称賛した行為を反省した。なお、天宝年間の官吏登用制度は、才能を基準とした人材選抜の正道から逸脱し、下級官吏もまた上級官吏に取り入る必要があった。これに対し、杜甫は「官定後戲贈(官定まりて後戯れ贈る)」(『詳注』卷三)という詩の中で、自らが河西尉の職を辞任した理由を、「淒涼為折腰(淒涼として折腰^{せいらう}の為なり)」と述べている。「折腰」とは、まさに下級官吏が上級官吏に媚びる行為を指す。こうした行為は、単なるお世辞を言うことにとどまらず、「詠懷五百字」の描写のように、民衆を鞭ち打って徴収した絹織物や金銭を、長安の君臣に献上することも含むのである。

しかし他方、すでに辞職した杜甫は「詠懷五百字」においても自ら隠遁するつもりがないことを主張し、次のように詠じている。

終愧巢與由、未能易其節 終に巢と由とに愧ずるも、未だ其の節を易うる能わず

(許由や巢父のように隠遁しなかったことを、私は深く恥じている。それにもかかわらず、君主を

補佐しようとする志を改めるつもりはない。)

ここで杜甫は、古代の賢人である巢父と許由のように隠遁できなかったことを恥じつつも、官職に就いて君主を補佐したいという政治的理想そのものは変わっていないことを表明している。さらに、彼は自らを太陽（君主の象徴）に向かって傾く葵と藿と喩えている。

葵藿傾太陽、物性固難奪 葵^き藿^{かく} 太陽に傾く、物性^{ぶつせい} 固^{もと}より奪い難し

（葵や藿でさえ太陽の方へ向かうというのだから、私に生まれついた君主への忠誠心は、容易に変えられるはずがない。)

このように君主への忠誠心を自己の本性（「物性」）と述べるとともに、杜甫は、玄宗の失政の責任を大臣たちに求めるに至り、次のように詠じている。

聖人筐篚恩、実願邦国活 聖人^{きやうひ} 筐^{ほう}篚^{こく}の恩、実^{かつ}に邦国の活せんことを願う

臣如忽至理、君豈棄此物 臣^も 如^し至理^{しり}を忽^{ゆるが}せにせば、君^あ 豈に此の物を棄つるや

（皇帝が臣下に与える賜物は、その恩に報いて政務に励み、唐王朝の再興を実現してほしいという思いから出たものである。もし大臣たちがその道理を顧みないのであれば、その賜物は結局、むなしく捨てられることになってしまうではないか。)

玄宗が寵臣たちに対して節度なくさまざまな宝物を賜ったことは、本来、長安城における君臣の奢侈な生活ぶりと、唐王朝の財力を浪費した実態を示すものである。なお、前述したように、杜甫は、賜られた絹帛が民間から強制的に徴収されたものであることも詠じている。それにもかかわらず、彼はここで、玄宗からの賞賜を、大臣たちに勤勉に政務を執るよう促すためのものであったと解している。すな

わち、玄宗は唐王朝の再興を願っていたにもかかわらず、大臣たちが享樂に溺れ政務を怠ったとされ、その結果、玄宗の失政の責任は大臣たちに転嫁されている。

以上の「自京赴奉先県詠懷五百字」の分析を踏まえると、杜甫は詩中で自らが隱遁するつもりがないことを明言しており、玄宗に仕えて唐王朝を復興したいという、すなわち仕官への志向を表している。彼は玄宗を「堯舜君」と呼び、玄宗の失政についても弁護する立場を取っている。これは、杜甫にとって玄宗がなお仕えるに値する明君であったことを示している。

しかし一方で、長安を離れた杜甫は、詩中において、下層民衆の困窮した生活と長安城における君臣の享樂的な光景とを対比させることによって、天宝末年における玄宗時代の失政に対する失望と憤懣とを直接的に表出していると理解できる。この時期における杜甫の辞官は、儒家思想における「天下有道則見、無道則隱」という觀念を体現するものと言えよう。

この詩に見られる杜甫の「仕」と「隱」の矛盾について、筆者は、玄宗時代の杜甫の作品における矛盾した玄宗像を反映したものであると考える。数十年にわたる玄宗の治世のもとで、唐王朝は国力の絶頂期を迎えた後、急速に衰退して存亡の危機に瀕するに至った。このような時代の流れの中で、杜甫にとって、玄宗を明君として評価すべきか、あるいは暗君と見なすべきかということは、きわめて複雑な問題であった。故に、杜甫は「仕官」と「隱遁」との間で葛藤に陥ったのである。

天宝十四載（755）の冬、杜甫が「詠懷五百字」を作った後、まもなく安史の乱が勃発した。翌年六月、長安が陥落し、玄宗は蜀の地（現在の中国四川省）へ逃亡を余儀なくされる。玄宗の統治が終わると同時に、肅宗が即位する。次章で検討するが、肅宗の政治的姿勢は、杜甫が肅宗時代に玄宗を評価する際の新たな指標となるのである。

第2章 杜甫の肅宗時代の作品における玄宗像

2.1 杜甫の至徳年間（756～758）の作品における玄宗像

天宝十四載（755）、杜甫は奉先県に帰省して間もなく、十一月に幽州（現在の中国北京市）を本拠地とする范陽節度使の安祿山^{あんろくざん}は史思明^{ししめい}と共に反乱を起こした。その反乱軍は十二月に洛陽を占領し、安祿山は自ら皇帝を名乗った。半年後の天宝十五載（756）六月、長安に近い潼関が反乱軍によって陥落すると、玄宗・楊貴妃・楊国忠ら皇室と高官は長安を脱出した。

長安を離れて三日目、左龍武大將軍陳玄礼^{ちんげんれい}は、唐王朝が戦乱に陥ったのは楊国忠兄妹が原因であるとし、兵士たちと楊国忠を殺害した。さらに、彼は玄宗に迫って楊貴妃に自殺を命じさせた。この事件は「馬嵬事変^{ばかいじへん}」と呼ばれ、後世の歴史研究において、太子李亨^{りこう}（後の肅宗）が玄宗の勢力を弱めるために企てた政変であったと考えられている³⁸。

その後、玄宗は蜀の地へ避難したのに対し、李亨は朔方軍^{さくほうぐん}の本拠地の靈武^{れいぶ}へ向かった。七月、李亨は靈武（現在の中国靈武市）に到着すると自ら即位を宣言し、年号を至徳と改め、唐王朝の新たな統治者即ち肅宗となった。

肅宗の即位は玄宗の許しを得ておらず、皇位継承の制度に則していないものである。しかし、都城長安が陥落し、統治者である玄宗が逃亡するという混乱の中であって、肅宗の即位は唐王朝の存続を示し、各地の軍隊の士気を鼓舞した。更に肅宗は郭子儀^{かくしぎ}、李光弼^{りこうひつ}などの有能な武將を重用し、反乱軍から一部の領土を取り戻した。そのため、唐王朝の復興を背負う肅宗に対して、蜀の地へ避難した玄宗は、当時の杜甫の作品における批判の対象となった。彼は至徳二載（757）九月の「北征」（『詳注』巻五）において、次のように詠じている。

姦臣竟菹醢、同惡随蕩析

姦臣^{かんしん} 竟^{ついで}に菹醢^{そかい}にせられ、同惡^{どうあく} 随^{したが}いて蕩析^{とうせき}さる

³⁸ 呂思勉『呂思勉全集・隋唐五代史』（上海古籍出版社、2004）148 頁を参照。

不聞夏殷衰、中自誅妹妲　　聞かず夏殷^{かいん}の衰えしとき、中^{うちみずか}自^{まつだつ}ら妹妲を誅せしを。

（奸臣とその一味は、ついに処刑された。しかし、夏や殷が衰亡した際に、桀や紂といった君主が、妹喜や妲己のような寵妃を自ら処刑したという話は聞いたことがない。）

桓桓陳將軍、仗鉞奮忠烈　　桓桓^{かんかん}たり　陳將軍、鉞^{えつ}に仗りて　忠烈^{ちゅうれつ}を奮^{ふる}う

微爾人尽非、於今国猶活　　爾^{なんじ}微^なかりせば　人^{ことごと}尽^とく非^ひならん、今に於て　国^{くに}猶^なお活^いく

（武勇に優れた陳玄礼將軍は、鉞をもって楊国忠および楊貴妃を処刑し、忠義を示した。もし陳將軍がいなければ、唐王朝はすでに滅びていたであろう。陳將軍のおかげで、今なお国家は存続している。）

詩中の「姦臣」（奸臣）は楊国忠を指し、「妹妲」は楊貴妃を喩えている。杜甫は、玄宗が楊国忠に政務を委ねて楊貴妃と享樂に耽ることこそが安史の乱が勃発した最大の原因であると考えた。そのため、彼は「忠烈」の語をもって、馬嵬駅で楊国忠を殺し、玄宗に楊貴妃の死を迫った陳玄礼を高く評価している。「於今国猶活」（国が引き続き存在する）とは、まさに陳玄礼の行為が唐王朝の運命を救ったことを意味するものである。

もし「忠」を「君主に従うこと」と理解すれば、玄宗の許しを得ずに楊国忠を殺し、楊貴妃に死を迫った陳玄礼の行為は、「不忠」あるいは「反逆」とも言えよう。ところが杜甫は、陳玄礼を「忠烈」と称賛している。このことから、杜甫の「忠」に対する解釈とは単なる君主への服従ではなく、むしろ国家の存続を支えるための行為と理解すべきであろう。

もう一つ注目すべきは、杜甫が詩中で、存亡の危機に瀕した唐王朝を夏と殷の滅亡に譬えていることである。夏の最後の君主である桀^{けつ}は妹喜^{まつき}を寵愛し、殷の最後の君主である紂^{ちゅう}は妲己^{だつき}を寵愛したために、それぞれ国家が滅亡に至った。杜甫は楊貴妃を「妹妲」（妹喜と妲己）に譬えることで、玄宗を暗に夏の桀や殷の紂のような亡国の君に喩えているのである。

このように玄宗を風刺した後、杜甫は「北征」の最後において太宗への敬慕を表明している。

煌煌太宗業、樹立甚宏達 煌煌たり太宗の業、樹立甚だ宏達なり

（太宗の輝かしい功業は、まことに宏大である。）

『詳注』は、杜甫が太宗のような明君を希求し、唐王朝の再興の実現を目指す点を指摘している³⁹。

太宗が杜甫にとって理想的な皇帝であった点については、すでに本論 1.3 節で言及した。天宝年間の杜甫の作品である「同諸公登慈恩寺塔（諸公の慈恩寺の塔に登るに同ず）」（『詳注』巻二）において、杜甫は、玄宗が楊貴妃とともに驪山で享楽に耽る姿を、「惜哉瑤池飲、日晏崑崙丘（惜しいかな瑤池の飲、日は晏崑崙の丘）」と詠じている。それに対し、太宗を舜に喩えて「廻首叫虞舜、蒼梧雲正愁（首を廻らして虞舜に叫べば、蒼梧雲正に愁う）」と詠じている。ここでの「虞舜」「蒼梧」はいずれも太宗を象徴するものであり、明君たる太宗への憧れが示されている。

また、至徳二載（757）、太宗の陵墓を訪れた際に詠じた「行次昭陵（行きて昭陵に次る）」（『詳注』巻五）においても、杜甫は太宗への敬慕を次のように詠じる。

往者災猶降、蒼生喘未蘇 往者 災い猶お降り、蒼生 喘ぎて未だ蘇らず

指麾安率土、盪滌撫烘鑪 指麾して率土を安んじ、盪滌して烘鑪を撫す

（先頃天災はなお降りかかり、民衆は苦しみにあえぎ、いまだ回復していなかった。太宗は臣下たちを指揮して国家を安定させ、天下の災禍を一掃し、民衆を慰撫した。）

明の朱鶴齡の見解によれば、「指麾安率土」の句は太宗が隋末の災いを一掃して天下を安定させたこ

³⁹ 『詳注』巻五、340 頁に「終以太宗事業、望中興之主」とある。

とを描いている。これに対し、安史の乱によって唐王朝は混乱に陥り、太宗の貞観年間における天下太平とは全く異なる状況となった。そのため、杜甫は太宗のように国家を安定させることができる君主を願ったのである⁴⁰。

当時の政治情勢のもとで、蜀の地へ逃れた玄宗は、明君としての太宗像からは程遠い存在であったことと言うまでもない。一方、杜甫が憧れた明君としての太宗像に最も近い存在は、まさに肅宗であった。彼は、「送樊二十三侍御赴漢中判官（樊二十三侍御が漢中判官に赴くを送る）」（『詳注』巻五）において肅宗の功績を次のように詠じる。

威弧不能弦、自爾無寧歲	威弧 弦する能わず、爾りしより 寧歲無し
川谷血橫流、豺狼沸相噬	川谷 血横流し、豺狼 沸として相い噬む
天子從北来、長驅振凋敝	天子 北より来たり、長驅して 凋敝を振う
頓兵岐梁下、却跨沙漠裔	兵を頓す 岐梁の下、却って跨ぐ 沙漠の裔

（弧星は狼星を威圧することができず、天下はそれ以降、安寧を失った。川や谷には血が流れ、豺や狼が互いに争い合っていた。肅宗は北方から軍を率いて南へ長驅し、反乱軍を撃退して困窮する民衆を救った。唐軍は岐山・梁山に駐屯し、さらに回鶻の軍と連合した。）

「威弧不能弦」の句は、弓を象徴する弧星が狼星を射止めず、その結果天下が乱れたことを示している。これは、安祿山を狼星に喩え、玄宗が安祿山の勢力の拡大を放任したために戦乱が勃発したことを暗示している。

後半における「天子」は肅宗を指す。肅宗は北の靈武から唐軍と回鶻の援軍を率いて反乱軍を撃退し、長安の奪還も目前に迫った。至徳年間に安史の乱が鎮圧されなかったとはいえ、反乱軍を何度も撃退し

⁴⁰ 『詳注』巻五、343 頁に「以灾降為祿山倡乱，如隋末兵戈者，朱長孺説也」とある。

た肅宗の英明たる君主像（「天子從北來、長軀振凋敝」）は、「行次昭陵」における太宗の姿（「指麾安率土、蕩滌撫烘炉」）に近づいたと言える。

さらに、肅宗を称揚する記述は、杜甫の至徳年間の作品においてもしばしば見られる。その例として、以下の詩句を挙げておこう。

今朝漢社稷、新數中興年 今朝 漢の社稷、新たに數う 中興の年

「自京竄至鳳翔喜達行在所（京より竄れて鳳翔に至り、行在所に達するを喜ぶ）」（『詳注』巻五）

近賀中興主、神兵動朔方 近賀す 中興の主、神兵 朔方に動くを

「送靈州李判官（靈州の李判官を送る）」（『詳注』巻五）

君誠中興主、經緯固密勿 君は誠に中興の主なり、經緯固より密勿たり

「北征」（『詳注』巻五）

百年垂死中興時 百年 死に 垂 とす中興の時

「送鄭十八虔貶台州司戸（鄭十八虔の台州の司戸に貶せらるるを送る）」（『詳注』巻五）

上述の「中興の年」「中興の主」「中興の時」といった肅宗への賛辞は、単なる誇張的表現ではなく、肅宗の至徳年間に於いて唐王朝が復興に向かっていったことを記すものである。

杜甫は、かつて天寶十四載（755）に詠じられた「詠懷五百字」において、玄宗を「堯舜の君」と称し、国をよく治めて開元の治を再現することを願っていた。しかしその後、安史の乱の勃発および玄宗の逃亡によって、その願いが実現することは叶わなかった。一方、即位した肅宗は唐軍を率いて反乱軍を撃退し、唐王朝の未来を担う存在となった。このような肅宗と玄宗との対比を通して、杜甫における玄宗

への期待が次第に失望へと転じていったことが理解できる。そして、至徳二載（757）に詠じられた「北征」において、彼は玄宗を夏の桀や殷の紂といった亡国の暗君に喩えるに至ったのであった。このような厳しい批判は天宝年間の作品には見られない。すなわち、至徳年間に入ると、杜甫の作品における玄宗像は暗君に変容したと言えよう。

2.2 乾元～上元年間（758～761）における肅宗と玄宗

至徳二載（757）十月、唐軍は都城である長安を奪還し、反乱軍は鄴城（現在の中国河北省邯鄲市）へ退却した。こうして唐王朝は一時的に平和な時期を迎えることとなった。肅宗は至徳元年（756）に靈武で自ら即位を宣言したが、これは玄宗の許可を得ておらず、皇位継承の礼法に違反していた。そのため、長安が奪還された後、肅宗は太上皇となった玄宗を蜀の地から長安に迎え、正式な譲位の儀式を行った。さらに翌年（758）には年号を乾元^{けんげん}と改めた。この年号は二年間続き、760年には上元^{じょうげん}と改元された。その後二年を経て肅宗は崩御し、762年に代宗が即位した。

この時期、杜甫は乾元元年の年初に左拾遺に任じられたが、六月に華州司功参軍に左遷された。乾元二年（759）、杜甫は辞任して華州（現在の中国陝西省渭南市華州区）を離れ、秦州や同谷などを經由して成都（現在の中国四川省成都市）に至った。上元元年から肅宗の崩御に至るまで、杜甫は成都で隠遁の生活を送った。

2.1 節で述べたように、至徳年間の杜甫の作品における玄宗像と肅宗像は対照的である。杜甫は、玄宗が唐王朝に亡国の危機をもたらしたと考え、彼を桀や紂のような暗君と見なした。一方、肅宗が靈武で即位し、唐軍を率いて反乱軍を撃破したため、杜甫は肅宗を隋末の反乱を平定した太宗に近い明君と見なした。

ところが、乾元・上元年間に至ると、杜甫の作品における肅宗は、明君の姿から乖離し、杜甫の批判の対象となるに至るのである。肅宗像の変化の原因について、筆者は、肅宗が長安を奪還した後、反乱の鎮圧に専念せず、かえって玄宗の勢力を弱めることに没頭した点にあると考える。肅宗は、玄宗が長安に戻り復位することを懸念したため、杜甫を含む玄宗の旧臣を左遷する一方、側近の宦官である李輔国^{りほくこく}を重用し、張皇后に政務を委ねた。さらに、肅宗は李輔国による玄宗を軟禁することを許した。これは、儒家思想における「孝」という道德観念に反する行為であった。

実は、杜甫の作品における肅宗像の変化は、その後の作品に見られる玄宗への思慕に結びついている。

したがって本節では、宦官による権力独占という政治情勢と、肅宗の不孝とされる行為という二つの側面から、乾元・上元年間の杜甫の作品における肅宗像が明君から乖離していく過程を分析する。

一 肅宗の失政

乾元元年（758）、杜甫は長安に戻って左拾遺に任命された。彼は「紫宸殿退朝口号」（『詳注』巻六）において「天顔有喜近臣知（^{てんがん}天顔喜び有りて近臣知る）」と詠じ、「至日遣興、奉寄北省旧閣老兩院故人二首（^{しじつきよう}至日興を遣り、^{ほくしょう}北省の^{かくろう}旧閣老・兩院の故人に寄せ奉る二首）」（『詳注』巻六）において「去年今日侍龍顔（去年今日^{りようがん}龍顔に侍す）」と述べている。「天顔」「龍顔」はいずれも肅宗を指し、杜甫が左拾遺として肅宗の近くに仕えていたことを示している。

玄宗時代に杜甫が任じられていた正九品下の右衛率府兵曹参軍（武器装備を管理する官吏）と比べると、従八品の左拾遺の官位は高くないものの、皇帝に直接進言することができるものである。彼は「春宿左省（^{はるさしろう}春左省に宿す）」（『詳注』巻六）では、翌朝に肅宗へ進言することを思い、期待したり不安になったりして眠れなかった心境を描いている。『詳注』によれば、この詩は杜甫の左拾遺の職務に対する熱意を表している。

しかし、その熱意はわずか数か月で消えてしまった。杜甫は「曲江陪鄭八丈南史飲（^{きよくこう}曲江にて^{ていはちじょう}鄭八丈^{なんし}南史に陪して飲む）」「曲江二首」「曲江對酒（曲江にて酒に對す）」「曲江對雨（曲江にて雨に對す）」（全て『詳注』巻六）など、曲江での行楽を題材とした一連の作品を残している。「曲江二首」における「一片花飛滅却春」（^{いっぺん}一片花飛びて春を^{げんきやく}滅却し）という句は花が散る様子を描写するため、これらの作品が晩春、すなわち四、五月頃に作られたものと推測できる。詩中では、かつて皇帝の側近で勤勉に仕えていた杜甫の姿とは対照的に、彼が曲江で遊び、不遇の憂いを晴らす様子が描かれている。

その不遇の原因について、杜甫は乾元二年（759）の「秦州見敕目、與二子有故、遠喜遷官兼述索居（^{しんしゅう}秦州にて^{ちよくもく}敕目を見るに、二子と故有り、遠く^{せんかん}遷官を喜び兼ねて^{さくきょ}索居を述ぶる）」（『詳注』巻八）において、次のように詠じる。

官忝趨栖鳳，朝回嘆聚螢　　官は^{かたじけな}忝くす^{せいほう}棲鳳^{はし}に趨るを，朝^{ちょう}より回^{かえ}りて^{しゅうけい}聚螢^{なげ}を嘆く

（私は左拾遺として栖鳳閣に務めているが、朝廷から帰ると、螢が集まるかのような荒涼とした住まいを前にして嘆息する。）

侏儒応共飽，漁父忌偏醒　　侏儒^{しゆじゆまさ}応に共に飽^あくなるべし，漁父^{ぎよ ぽ ひとえ}偏に醒^さむるを忌む

（侏儒のような者は何もせずに政務を怠っている一方、政治の情勢を見通す漁父のような者は、かえって嫉まれている。）

「官忝趨栖鳳」とは長安で左拾遺を務めたことを指す。次の句では、杜甫は自らを「楚辞」において世の濁りを深く理解している「漁父」に喩え、仕事を怠ける官僚たちを「侏儒」に喩える。『詳注』によれば、これは暗に杜甫の進言が肅宗を怒らせたことを示している。

その進言の内容について、『新唐書』や『旧唐書』には記録されていない。しかし、聞一多「少陵先生年譜会箋」によると、杜甫は進言により房琯・賈至・^{ぼうかん}・^か・^し・^{げんぶ}嚴武の一派と見なされ、華州司功へ左遷されたと記されている⁴¹。杜甫は賈至や嚴武らと親交が厚く、現存する作品の中にも彼らに贈った詩が多く見られる。また、至徳二載（757）五月、房琯が宰相を罷免された際、杜甫は彼を弁護する立場から、「奉謝口敕放三司推聞状」を皇帝に奉った。乾元元年には、賈至が汝州へ、房琯が邠州へそれぞれ左遷されており、杜甫自身も房琯らの一派と見なされ、同年六月に左遷されたと考えられるのである。

肅宗による房琯・賈至らの左遷は、実際には玄宗の旧臣に対する弾圧であった。至徳元載（756）八月頃、成都にいた玄宗は肅宗の即位を聞くと、肅宗を輔佐するために宰相の房琯や韋見素らを靈武へ派遣した。房琯は一定の政治的才能を備え、玄宗に任じられた宰相であったため、玄宗朝の旧臣に厚く信頼

⁴¹ 聞一多『唐詩雜論』（上海古籍出版社、2000）68頁を参照。

されていた。即位直後の肅宗は、玄宗朝の旧臣の支持を取り付けようとしたため、彼を依然として宰相に任命したのである。

しかし同時に、肅宗は房琯を中心とする玄宗朝の旧臣の勢力の拡大に不安を抱いた。そこで彼は自らの権勢を強化するため、側近の宦官の李輔国を重用し、さらに張皇后にも政務を任せたとのである。

至徳二載（757）十月、南海太守賀蘭進明が肅宗に「房琯は実際には玄宗のみに忠誠を尽くし、肅宗には忠誠を示していない」と進言し、房琯は私兵を蓄え、野心を抱いている可能性があることを指摘した。肅宗はその進言を信じて房琯を憎むようになった⁴²。

玄宗が長安に戻ると、肅宗は玄宗朝の旧臣が自らに背くようになることを恐れた。そして玄宗の勢力を弱めるべく、玄宗朝の旧臣の左遷を相次いで行った。まず、乾元元年（758）五月、張鎰を宰相から罷免し、続いて賈至・房琯・崔沔らを左遷した。次に、乾元二年（759）、房琯の同党の罪により嚴武・劉秩らも左遷された。史書には、「上皇が任命した宰相は一人も残っていなかった」⁴³、「上皇の任じた大臣には、政治を行う者がいなかった」⁴⁴と記している。このような政治情勢において、かつて房琯を弁護し、賈至らと親交があった杜甫が左遷されたことは必然であろう。

肅宗が前代の皇帝に仕えた大臣を遠ざけることによって、自らの権力基盤を固めるという政治手段は、歴代においても珍しいことではない。しかし、肅宗が有能な大臣を重用せず、むしろ宦官の李輔国や張皇后に政務を委ねることは、唐王朝に悪影響を及ぼした。

至徳二載（757）、李輔国らは戦功のあった建寧王李倓に謀反の意図があると誣告し、李倓は肅宗から死を賜った。乾元年間には、房琯・賈至・杜甫ら玄宗朝の旧臣が左遷されただけでなく、太子時代の肅宗から信任されていた宰相の李泌も李輔国の讒言によって辞任を余儀なくされた。その結果、宦官は権

⁴² 『新唐書』卷一百三十九列伝第六十四に「対曰、『此於聖皇似忠、於陛下非忠也……』帝入其語、始惡琯」とある。

⁴³ 『新唐書』卷一百四十列伝第六十五に「於是上皇所置宰相無在者」とある。

⁴⁴ 『旧唐書』卷一百十二列伝第六十二に「上皇所命宰臣、無知政事者」とある。

力を独占し、有能な人材を登用できない状況は深刻になったのである。

この政治状況に対し、杜甫は「曲江対雨」(『詳注』巻六)において、以下のように開元時代への思慕を表している。

龍武新軍深駐輦	龍武の新軍 深く輦を駐め
芙蓉別殿漫焚香	芙蓉の別殿 漫り香を焚く
何時詔此金錢会	何れの時か此の金錢の会を ^{みことのり} 詔して
暫醉佳人錦瑟傍	暫く酔わん佳人錦瑟の ^{かたわら} 傍

(龍武軍はいまや常に宮城の内に駐屯しており、芙蓉殿には人影もないのに、香だけが焚かれている。いつになれば皇帝は再び金錢会を開く詔を下すのだろうか。私はしばらく歌舞に身を寄せ、酔っていたい。)

『詳注』によれば、「龍武の軍」は、玄宗に編成された近衛軍である。「芙蓉の殿」は、玄宗がかつて曲江に遊んだ際に滞在した芙蓉園である。「金錢の会」は、玄宗の開元元年(713)九月に開催された宴会を指す⁴⁵。しかし玄宗の退位後、龍武軍は神武軍に改名され、芙蓉園には人影が絶え、金錢会も二度と開催されることはなかった。

この詩は乾元元年(758)、杜甫が肅宗に疎まれたことを自覚して創作されたものである。明の錢謙益や清の黄生らは、この詩について、杜甫が開元年間に「三大賦」を献じた後に集賢院へ召されたことを懐かしく思うものと解していた⁴⁶。しかしながら、筆者は当時の宦官が権力を独占した政治情勢を考慮すると、その玄宗時代への思慕を、姚崇や張九齡など有能な人材を登用した開元年間の玄宗への追慕と解釈する方がより適切ではないかと考える。

⁴⁵ 『詳注』巻六、379頁を参照。

⁴⁶ 清・黄生『杜詩説』巻八(黄山書社、1994)309頁を参照。

ところで、肅宗の失政は文官の登用だけでなく、軍事政策にも及んでいた。乾元元年（758）九月、肅宗は郭子儀・李光弼らに命じて反乱軍を攻撃させた。しかし一方で、兵権を握った郭子儀・李光弼ら將軍の権勢の拡大を懸念していたため、肅宗は宦官の魚朝恩を監軍（事実上の総指揮官）に任命した。乾元二年（759）、魚朝恩は李光弼が主張した「むしろ軍を起こして史思明の反乱軍に迫るべきである」⁴⁷との提案を受け入れず、その結果、唐軍は鄴城で魏州からの史思明軍に大敗した。

その敗北について、杜甫は「秦州見敕目、與二子有故、遠喜遷官兼述索居」（『詳注』卷八）の中で次のように悲嘆している。

忠臣詞憤激、烈士涕飄零 忠臣 詞憤激^{ふんげき}し 烈士 涕飄零^{ひょうれい}す

（忠臣は憤懣のあまり進言し、烈士は涙を禁じ得ない。）

仰思調玉燭、誰定握青萍 仰ぎて思う 玉燭^{ぎょくしよく}を 調^{ととの}うるを 誰か定めて青萍^{せいへい}を握らん

（仰ぎ見ては、陰陽を調和することを思うが、いったい誰が青萍の剣を握るのだろうか。）

「憤激」「涕零」という語は、宦官の干渉により鄴城の戦いに負けたことに対する杜甫の憤懣を示している。「調玉燭」は天下を平和にすることを意味し、「握青萍」は郭子儀・李光弼が兵権を握ることを指す。詩中で杜甫は、肅宗が郭子儀・李光弼に軍事の主導権を委ねるべきであると強く願っていた。

しかし、その願いは実現されなかった。長安の外では、史思明の反乱軍は依然として唐王朝を脅かしていた。そしてまた、長安の城内では、宦官と皇后は権力を独占し、朝政を専断していた。このような状況に対し、杜甫は乾元二年（759）の「夏日嘆（夏日の嘆）」（『詳注』卷七）の中で次のように詠じる。

⁴⁷ 『新唐書』卷一百三十六列伝第六十一に「思明勒兵魏州、欲以怠我、不如起軍逼之」とある。

上蒼久无雷、無乃号令乖　　上蒼^{じょうそう}久く雷無し、乃^{すなわ}ち号令^{ごうれい}の乖^{そむ}くこと無^なからんや

(天は久しく雷も雨も下さない。天の号令が乱れているせいではないだろうか。)

万人尚流冗、挙目為蒿萊　　万人尚^なお流^{りゅう}冗^{じょう}、目を挙げれば惟^{ただ}だ蒿萊^{こうらい}あるのみ

至今大河北、化作虎与豺　　今に至りて大河^{たいが}の北、化して虎と豺^{やまいぬ}と作る

(多くの人々はいまも住まいを失い、見渡せば、農地は荒廃してしまった。黄河の北側一帯は、すでに反乱軍の拠点になってしまった。)

眇然貞觀初、難與数子偕　　眇^{びょうぜん}然^{じょうがん}たり貞觀の初め、数子^{すうし}と偕^{とも}にし難^{がた}し

(貞観時代はすでに遠い過去となり、あの時代の賢臣たちとともに国を治めることは、もはやかなわない。)

『詳注』に引く盧元昌の注釈によれば、「号令乖」とは李輔国の権力独占により天災が起こったことを指すという⁴⁸。「万人尚流冗」以下の四句は、安史の乱により民衆が各地を流浪し、農地が荒廃した惨状を描いているという。最後の句において、杜甫は「数子」(房玄齡・杜如晦・魏徵ら賢臣)が太宗を輔佐して国をよく治めた貞観時代への憧れを表明している。

注目すべきは、杜甫が詩中で示した太宗の貞観時代への追慕が、実際には、当時の肅宗の治世が貞観時代に遠く及ばないことを暗示している点である。前述のように、肅宗の失政によって乾元・上元年間の政治情勢が悪化していた。これにより、乾元年間における杜甫の作品に見られる肅宗像は、至徳年間の作品において太宗のような「中興の君主」として描かれていた姿勢とは、大きく異なっていたことが理解できよう。

⁴⁸ 『詳注』巻七、452 頁に「盧元昌曰、李輔国専掌禁兵、事無大小、制敕皆其所為。詩云『号令乖』、指此」とある。

二 肅宗の不孝

至徳二載（757）、杜甫は「収京三首（京を収む三首）」（『詳注』巻五）其の二において、次のように詠じる。

羽翼懷商老、文思憶帝堯 羽翼^{うよく} 商老^{しょうろう}を懷^{おも}い、文思^{ぶんし} 帝堯^{ていぎょう}を憶^{おも}う

（君主を補佐した商山の賢人を懷かしみ、才能と道德を身につけた堯のような明君を思う。）

「羽翼懷商老」の句における「商老」とは、漢の恵帝を補佐した四人の隠士を指す。杜甫は彼らのような賢臣を懷かしみ、李輔国や張良娣が権勢を振るう当時の政治情勢に対する憂慮を示したのである。

「文思憶帝堯」の句における「帝堯」とは玄宗を指す。『詳注』は『尚書』の「虞書・堯典」に見える「昔在帝堯、聰明文思、光宅天下、将遜于位、讓于虞舜（賢明な帝堯は天下を安定させたが、やがて自ら退位して皇位を虞舜に讓った）」を引用し、玄宗が肅宗に讓位したことを堯の讓位に喩えていると解している⁴⁹。この句に対し、明の朱鶴齡は、杜甫が肅宗に皇位を讓った玄宗を大切に扱うことを望んだものと解する⁵⁰。

当時、肅宗の即位から長安の奪還までわずか二年しか経っていないため、多くの大臣や民衆は玄宗を深く思慕していた。『資治通鑑』によれば、玄宗が長安に帰還した際、長安の民衆は道路の両側に集まり歓呼して迎え、さらには喜びのあまり涙を流す者さえあったという⁵¹。しかし杜甫は、玄宗の帰還が肅宗の統治に脅威となるかもしれないと感じていた。

実際、肅宗は玄宗の勢力を弱めるために、玄宗朝に仕えた官僚を次々と左遷したのみならず、李輔国

⁴⁹ 『詳注』巻五、355頁を参照。

⁵⁰ 明・朱鶴齡『杜工部詩集輯注』（河北大学出版社、2009）154頁を参照。

⁵¹ 『資治通鑑』巻二百二十唐紀三十六に「百姓出国門奉迎、二十里不紀、舞躍呼万歳、有泣者」とある。

に玄宗を軟禁させることも許した。上元元年（760）七月、南内の興慶宮に住む玄宗は強制的に西内の太極宮へ移された。太極宮は唐初に造られた宮殿であり、当時の政治の中枢から遠く離れていた。李輔国は玄宗の側近であった陳玄礼や高力士を追放するとともに、兵士を配置して玄宗と外部との接触を監視していた。このようにして玄宗の権勢を弱め、やがて肅宗の近臣たちによる権力独占の政局に至ったのである。

この時、杜甫は長安から遠く離れて成都にいたが、なおも玄宗の境遇を憂慮していた。彼は上元二年（761）の「杜鵑行」（『詳注』巻十）において次のように詠じる。

君不見昔日蜀天子	君見ずや昔日の蜀天子
化為杜鵑似老鳥	化して杜鵑と為り 老鳥に似たり
寄巢生子不自啄	巢に寄せ子を生むも 自らは啄まず
群鳥至今為哺雛	群鳥今に至るまで 為に雛を哺む
雖同君臣有旧礼	君臣に同じく 旧礼有りと雖も
骨肉滿眼身羈孤	骨肉は眼に満ちて 身は羈孤なり
業工竄伏深樹裏	業に工みに竄伏す 深樹の裏
四月五月偏号呼	四月五月 偏えに号び呼ぶ
其声哀痛口流血	其の声は哀痛 口は血を流すも
所訴何事常区区	訴うる所何事ぞ 常に区区たり
爾豈摧殘始發憤	爾豈に摧殘せられて 始めて發憤し
羞帶羽翮傷形愚	羽翮を帯ぶるを羞じ 形の愚なるを傷むか

（君はかつての蜀の天子を見たことがないのか。彼は死後、杜鵑となり、その姿は老いた鳥のようである。他の鳥の巢に身を寄せて雛を生みながら、自ら餌を与えることすらできない。今日に至るまで、群れの鳥たちはその雛を育てている。君臣の旧来の礼は、なお保たれている。しかし、目に

映るのは家族ばかりで、彼自身は拘束されて孤独である。杜鵑は樹木の中に身を潜め、四月、五月になると、ひとりで声を上げて鳴く。その声は哀切を極め、ついには口から血を流すほどである。その嘆きは細く、いったい何を訴えているのか。君は、傷つけられてはじめて憤りを発したのか。羽翼を備えることを恥じ、自らの境遇に苦しんだ。)

詩の冒頭において、杜甫は古の蜀国の君主が死後に杜鵑へと化したという伝説を用い、軟禁された玄宗の境遇を喩えている。「骨肉满眼身羈孤」の句は、骨肉が繋がっていないことに託して玄宗と肅宗との断絶を示している。「業工竄伏深樹裏」の句は、樹に潜む杜鵑の姿を借りて、玄宗が太極宮に幽閉された実態を暗示する。「其声哀痛口流血」には玄宗の悲しい心境が描かれている。最後は「爾豈摧殘始發憤」と詠じ、玄宗の側近が相次いで追放されたことを暗示している。

『新唐書』によれば、肅宗は李輔国が詔を偽って玄宗を軟禁することを拒まないばかりか、かえって彼を正三品の兵部尚書に昇進させた⁵²。その不孝に対し、杜甫は「石筍行」(『詳注』巻十)においても、「政化錯迕失大体(せい か さんぐ づ して 大体を失い)」と詠じ、肅宗における倫理の欠如を厳しく批判している。

儒家の知識人である杜甫は、生涯を通じて孝道を重んじた。例えば、「贈特進汝陽王二十とくしん二韻(特進 汝陽王に贈る 二十二韻)」(『詳注』巻一)では汝陽王を「平居孝義称(へい きょ ぎょう ぎ 称 へらる)」と称賛している。「送李校書二十六韻(李校書を送る 二十六韻)」(『詳注』巻六)においても、「何時太夫人、堂上会親戚(何れの時か 太夫人、堂上に 親戚を 会せん)」と詠じ、母親を長安に迎える李舟の孝行を高く評価している。さらに、玄宗自身も孝道を重んじる道徳的模範であった。『旧唐書』によれば、彼は天宝三載(744)十月に「天下の民間に『孝経』一冊を蔵すべし」との詔を下し⁵³、また父の睿宗の陵墓を注意深く守った。玄宗の孝行に対し、杜甫は「橋陵詩三十韻因呈県内諸官(橋陵詩三十韻、因りて 県内の 諸官

⁵² 『新唐書』巻二百八列伝第一百三十三に「輔国以功遷兵部尚書」とある。

⁵³ 『旧唐書』巻九本紀第九玄宗下に「詔天下民間家藏『孝経』一本」とある。

に呈す)」（『詳注』巻三）において次のように讃えている。

中使日相繼、惟王心不寧 中使^{ちゅうし}日^ひに相^あい^ひ繼^つぐも、惟^これ王^や心^{しん}寧^{やす}んぜず

（使者が日ごとに相次いで派遣され、君主の心は落ち着くことがなかった。）

孝理敦国政、神凝推道経 孝理 国政を敦^{あつ}くし、神凝^{しんぎょう} 道経^{どうけい}を推^おす

（孝行を基本とした政治によって国を治め、専心して『道德経』を世に広める。）

前句は、玄宗が使者を派遣して睿宗の陵墓を守らせたが、それでも心が落ち着かなかったという。ここでは玄宗の睿宗への思いが窺われる。後句の「孝理敦国政（孝理国政を敦くし）」は、孝道を重んじる玄宗の治世を讃えたものである。このような玄宗の孝行に対し、肅宗の行為は明らかに儒家思想における「孝」の観念に反するものであった。そのため、後世の評価においては、肅宗への厳しい批判が見られるようになる。

例えば、『容齋随筆』の「諸公論唐肅宗（諸公 唐肅宗を論ず）」においては、肅宗に対する後世の評価が多く収録されている。洪邁は、肅宗を「其不孝之惡、上通于天」（その不孝の罪は天にまで達する）と断罪している。さらに彼は、杜甫が大歴元年（766）に詠じた「杜鵑」（『詳注』巻十四）における「君看禽鳥情、猶解事杜鵑（君看よ禽鳥^{み きんちょう}の情、猶お杜鵑^{つか}に事うるを解す）」の句を、肅宗が父母をよく養う禽獣にも及ばないことを批判したものと解している。また、そこには唐の顔真卿や宋の蘇軾・黄庭堅らの作品における肅宗を糾弾する記述も含まれている。これらの記述はいずれも、肅宗の不孝が後世にわたって深い批判を受けたことを示している⁵⁴。

⁵⁴ 清・洪邁『容齋随筆』容齋五筆巻二（中華書局、2015）667頁を参照。

以上の分析が示すように、乾元・上元年間の肅宗時代の政治情勢は、天寶年間の玄宗の治世と類似する点が少なくない。宦官の李輔国の権力独占と、天寶年間における外戚の楊国忠の専権はいずれも、才能を基準とする人材登用の正道から逸脱していたことを示している。また、肅宗が張皇后に政務を委ねることは、玄宗の楊貴妃に対する寵愛を上回っていたといっても過言ではない。さらに肅宗は、自らの権力を固めるために房琯や杜甫らの玄宗朝の旧臣を左遷したのみならず、宦官の魚朝恩を派遣して兵権を握る郭子儀・李光弼らに干渉した結果、鄴城の戦いの敗北を招いた。これにより反乱軍の勢力が再び拡大した社会的危機は、天寶末年の安史の乱の勃発時よりも深刻であったと言えよう。

2.1 節で述べたように、至徳年間の杜甫の作品において、肅宗は戦乱を平定する太宗のような明君として称えられたのに対し、玄宗は戦乱を招いた夏の桀や殷の紂のような暗君に喩えられている。しかし、乾元・上元年間に入ると、肅宗時代の政治情勢の悪化と肅宗の不孝に伴い、肅宗の明君像は失墜した。その結果、杜甫の玄宗に対する見方も変化している。こうした変化は、肅宗時代の杜甫の作品における玄宗への思慕に認められる。その後の展開については、次章で分析してゆく。

第3章 杜甫の代宗時代の作品における玄宗像

3.1 代宗時代（宝応～永泰年間）の社会状況と杜甫

以下に、代宗時代（宝応～永泰年間）の社会状況と、それに対する杜甫の作品を簡単に見てゆきたい。

762年、玄宗および肅宗が相次いで崩御し、代宗李豫が即位した。代宗の治世は17年間に及び、その間に宝応（762～763）、広徳（763～764）、永泰（765～766）、大暦（766～779）と、年号が実に四度も改められた。

代宗の即位を迎えたものの、唐王朝は再び盛んになることはなかった。宝応元年（762）から永泰元年（765）にかけての四年間、各地では戦乱が頻発していた。

宝応元年（762）、安史の乱は未だ平定されず、史思明およびその子・史朝義の反乱軍は依然として唐王朝を脅かすと同時に、吐蕃の軍隊が西部の辺境から侵入した。杜甫は「野望」（『詳注』巻十）「又観打魚（又た打魚を観る）」（『詳注』巻十一）などの作品において、内外の二重の危機に直面している唐王朝への憂慮を表している。

同年七月頃、劍南兵馬使徐知道は蜀の地で謀反を起こした。この時、杜甫は綿州（現在の中国四川省綿陽市）から成都に帰る途中で、戦乱のために梓州（四川省三台県）への避難を余儀なくされ、成都の家族との音信が途絶えた。梓州に滞在していた間、彼は「悲秋」「九日登梓州城（九日梓州の城に登る）」（全て『詳注』巻十一）などの詩を作り、家族への深い愛情を詠じている。

また、広徳元年（763）に詠じた「喜雨（雨を喜ぶ）」（『詳注』巻十二）において、杜甫は干ばつの後に雨が降ったことを喜ぶと同時に、袁晁が率いる反乱軍が呉越地方を占拠したことに対する不安も表している。

同年十月、吐蕃軍は松州・維州を一気に占領して長安を陥落させた。杜甫は代宗が陝州へ逃亡したことを聞き、「王命」「遣憂（憂いを遣る）」「冬狩行」（全て『詳注』巻十二）など一連の詩を作り、唐王朝が再び滅亡の危機に瀕したことを悲しんだ。

さらに広徳二年（764）、安史の乱の鎮圧に対して功績を立てた突厥の僕固懷恩は、吐蕃・回鶻・羌な

どの諸民族とともに反旗を翻した。杜甫は「別唐十五誠因寄礼部賈侍郎（唐十五誠に別る、因りて礼部の賈侍郎に寄す）」（『詳注』巻十四）において「漢將仍横戈（漢將仍お戈を横たえり）」（唐の將軍僕固懷恩はまだ朝廷に反抗している）と詠じ、「雲安九日鄭十八携酒、陪諸公宴（雲安の九日に鄭十八酒を携う、諸公の宴するに陪す）」（『詳注』巻十四）で「万国皆戎馬（万国皆な戎馬なり）」と述べ、唐王朝が数十万の反乱軍に対抗しなければならない苦境に陥ったことを描いている。

永泰元年（765）四月、劍南節度使嚴武が没すると、嚴武の後任をめぐって郭英乂・崔旰・楊子琳らは相次いで挙兵した。そして蜀の地は大いに乱れた。このような状況にあって、杜甫は「長江二首」（『詳注』巻十四）其一で「盜賊爾誰尊（盜賊爾を誰を尊ばん）」（皇帝以外の誰を尊敬しようというのか）と詠じ、崔旰らの乱臣たちに降伏を勧めている。

しかし代宗が年号を大暦（766）に改めると、唐王朝は比較的平和な時期を迎えることとなった。そこで、第三章では、この社会状況の変化を踏まえ、代宗時代（762～779）を、宝応・広徳・永泰年間（762～765）と大暦年間（766～779）の二つの時期に分けて、その時期における杜甫の作品を論じたい。本節では、まず前半の宝応・広徳・永泰年間における杜甫の作品を論じることとする。

一 宝応年間

宝応元年（762）四月、代宗は、かつて房琯の同党と見なされ、肅宗によって左遷された嚴武を長安に召還した。杜甫は嚴武に贈った「奉和嚴中丞西城晚眺十韻（嚴中丞の西城晚眺に和し奉る十韻）」「奉送嚴公入朝十韻（嚴公の入朝するを送り奉る十韻）」（全て『詳注』巻十一）など一連の詩の中で、代宗が有能な人材である嚴武を重用したことを喜び、彼が唐王朝を再興することへの期待を抱いている。

杜甫は蜀の地で「為閬州王使君進論巴蜀安危表（閬州王使君の為に巴蜀の安危を論ずる表を進む）」「東西兩川說」（全て『詳注』巻二十五）の二篇の文を作り、代宗に蜀の地を治める方策を提言した。宝応～永泰年間における大騒乱に対し、彼は詩においても、肅宗・代宗時代の政治上の欠陥を度々指摘し、朝政への深い関心を表している。さらに杜甫は玄宗時代を追慕することによって、代宗が玄宗に倣うべ

きである、すなわち唐王朝が玄宗の治世に戻るべきであるという主張を繰り返し述べている。以下、作品中におけるこの杜甫の主張を年代順に分析してゆく。

宝応元年（762）七月、劍南兵馬使徐知道の乱が勃発した。戦乱のため、杜甫は成都に帰れずに梓州にとどまり、「光祿坂行」（『詳注』巻十一）を詠じた。詩の前半では梓州の光祿坂の風景が描かれ、後半では次のように詠じている。

馬驚不憂深谷墜	馬 ^{おどろ} 驚くも憂 ^{うれ} えず 深谷 ^お に墜つるを
草動只怕長弓射	草動 ^{おそ} き只だ怕 ^{おそ} る 長 ^{ちやうきゆう} 弓 ^い の射んことを
安得更似開元中	安 ^{いざくん} ぞ得 ^{きら} ん更に開元中に似んことを
道路即今多擁隔	道路は即 ^{そつこん} 今 ^{ようかく} 擁隔多し

（馬が驚いたとしても深い谷に落ちるのではと恐れはしないが、ただ草が揺れただけで、盗賊の長弓に射られるのではないかと恐れる。いかにして再び、平和な開元の世を取り戻すことができようか。今は道が塞がれ、人々の往来も絶えてしまった。）

『旧唐書』玄宗本紀によれば、開元年間には天下が安定しており、遠方へ出かける場合でも身を守るための武器を携える必要はなかった⁵⁵。これに対し、宝応年間の蜀の地では、反乱軍が交通を遮断することとなり、その治安は極めて悪化した。詩中における「叛軍の長弓に射られることは深谷に落ちるよりも恐ろしい」という描写は、戦乱下における蜀の地の民衆の不安を如実に示すものである。このような社会秩序の崩壊にあって、杜甫は平和な玄宗の開元時代を懐かしみずにはいられなかったのであろう。

二 広徳年間

⁵⁵ 『旧唐書』巻九本紀第九玄宗下に「天下乂安、虽行万里、不持兵刃」とある。

広徳年間（763～764）、地方の節度使は軍事・行政権を掌握し、地方政権を形成した。杜甫はこのよう
な藩鎮が割拠する状況を踏まえて「有感五首（感有り五首）」（『詳注』巻十一）を作った。

第一首において彼は、地方の節度使が朝廷の命令に背き、反乱軍の平定に全力を尽くそうとしないこ
とを批判している。第二首において、杜甫は節度使が割拠した原因は代宗の政策であると述べている。
というのは、代宗は反乱鎮圧のために節度使にさらなる兵権を与えた結果、むしろ朝廷の権威が失墜し
てしまったのだという。第三首は代宗即位後の奢侈な生活を非難している。さらに杜甫は、第四首と第
五首において節度使の権力を抑止するための対策を立てて詠じている。特に第四首において、彼は肅宗
に対し、玄宗の天宝十五載（756）に行われた分封制を採用することを勧め、次のように詠じる。

授鉞親賢往、卑宮制詔遥 まさかり 鉞 を授けて 親賢往き、宮をひくして 制詔遥かなり
終依古封建、豈独聴簫韶 ついに古の封建に依らば、豈に独り 簫韶 を聴くのみならんや

（皇帝は軍事権を皇室の賢人に委ね、彼らを地方へ派遣する。そして皇宮からの詔は遠くまで届く。

もし最後まで古代の封建制度を実施したのであれば、どうしてただ簫韶の音を聞くにとどまるだろ
うか。）

ここでいう「親賢」とは玄宗の皇子たちを指し、「卑宮」は安史の乱の際に玄宗が避難した蜀の地を指
し、実際には玄宗自身を意味する。「簫韶」とは平和の象徴とする舜の治世における音楽である。

天宝十五載（756）七月、玄宗は房琯の提言を採用して皇子たちを各地に派遣した。たとえば、永王李
璣は山南東路・黔中・江南西路の節度使に、盛王李琦は広陵郡都督・江南東路淮南道節度使に、豊王李
珣は武威郡都督・河西・隴右・安西・北庭節度使に任じられた⁵⁶。このようにして、玄宗は蜀の地に避難
していながらも、各地に命を伝えることができた。皇室は他の臣下に比べて唐王朝への忠誠心が篤かつ
たため、このような方策は社会秩序の維持につながったのである。

⁵⁶ 『新唐書』巻五本紀第五を参照。

しかし、肅宗時代になると、皇室の重用はほぼ見られなくなった。本論 2.2 節で述べた通り、肅宗は自らの権威を強化するため、側近の宦官を重用して玄宗朝の旧臣を左遷した。それだけでなく、肅宗も皇子たちを長安にとどまらせて地方への赴任を禁じることで、その権力基盤を固めようとした。これにより皇室による反乱は防止されたものの、地方節度使を増長させてしまった。

そこで、杜甫は代宗に対し、肅宗ではなく玄宗に倣うべきであると勧めた。詩中の杜甫の主張によれば、分封の制度を実施することによってこそ、地方節度使の権力拡大を抑制し、天下太平を象徴する簫韶の音を再び聴くことができるという。付言すると、この主張は「為閬州王使君進論巴蜀安危表」にも通じている。この表において、杜甫は天宝十五載に実施された分封制度を高く評価し、それこそが唐王朝を万世にわたり存続させるための道と見なしていた⁵⁷。

広徳二年（764）、杜甫は成都に帰り、嚴武の幕府に幕僚として仕えた。この時、彼は代宗を諫めようとして「憶昔二首（昔を憶う二首）」（『詳注』巻十三）を詠じ、詩中で肅宗・代宗の治世を玄宗の治世と対照的に描いている。

【憶昔二首」其一】

第一首では、杜甫はまず肅宗時代の政治への批判を中心として次のように詠じる。

鄴城反覆不足怪	鄴城反覆するは 怪しむに足らず
関中小兒壞紀綱	関中の小兒 紀綱を壊り
張后不樂上為忙	張后樂しまず 上 為に忙し
至令今上猶撥乱	今上をして 猶お乱を撥め
勞心焦思補四方	心を勞し思いを焦し 四方を補わしむるに至る

（鄴城を回復できないのは不思議ではない。それは、朝廷における奸臣たちが社会の秩序を乱した

⁵⁷ 『詳注』巻二十五、1806 頁に「必以親王委之節鉞、此古之維城磐石之計明矣、陛下何疑哉」とある。

ためである。肅宗はしばしば張皇后の歡心を買おうとした。その結果、今の代宗はなお内外の乱を平定することに苦心している。）

冒頭の「鄴城反復」とは、肅宗乾元二年（759）、唐軍と反乱軍の残党との間で鄴城をめぐる行われた戦いを指す。しかし、郭子儀や李光弼らの名將が統率する唐軍は、最終的には史思明の反乱軍に敗北した。肅宗に任命された総指揮官である魚朝恩が李光弼の進言を採用しなかったことは、その敗因の一つとされる。これは、肅宗が自らの権力を強化するために宦官を重用した結果であった。なお、第二句における「関中小兒」も肅宗の信任を得て朝政を専断した宦官李輔国を指す。

第三句「張后不樂上為忙」というのは、肅宗が張皇后の権力拡大を抑えることができなかったことをいう。最後の句において、杜甫は宝應・広徳年間に勃発した騒乱の原因を肅宗の失政と見なしている。肅宗が政務を張皇后に委ねたことが政治上の過失であるのは言うまでもないが、前述の「有感五首」に詠じられた、肅宗による皇室権力の抑制も失政として指摘されている。

本詩の後半では、杜甫は代宗の広徳元年（763）における吐蕃の侵入を次のように詠じている。

為留猛士守未央	為に ^{もうし} 猛士を留めて ^{びおう} 未央を守らしめしに
致使岐雍防西羌	^{きよう} 岐雍をして ^{せいきよう} 西羌を防がしむるを致す
犬戎直来坐御床	^{けんじゅう} 犬戎直ちに来たりて ^{ぎょしょう} 御床に坐す
百官跣足随天王	^{ひやつなんせんそく} 百官跣足にして ^{したが} 天王に随う

（代宗は勇敢な將士に命じて京城を守らせたため、岐山・雍州の地では、吐蕃を防ぐ者がいなくなった。その結果、吐蕃の軍は皇帝の御座を奪い取った。都城の官僚たちは裸足のまま、代宗に従って長安を脱出した。）

第一句は、代宗が宦官程元振の讒言を信じ、「猛士」である郭子儀の兵権を奪い取って長安に拘束した

こと（「守未央」）を指す。辺境の唐軍は郭子儀の指揮を欠いたため、広徳元年の冬には、唐軍は吐蕃の軍（犬戎）に相次いで敗北した。その結果、吐蕃軍はさらに東へ進軍して長安を占領するに至った（「坐御床」）。都城が陥落すると、官僚たちは裸足のまま代宗に従って陝州へ逃亡せざるを得なくなったのであった（「百官跣足随天王」）。

【「憶昔二首」其二】

「憶昔二首」其一では、杜甫は肅宗・代宗の失政を批判しているが、一方で、「憶昔二首」の其二は、玄宗時代の社会情勢を追憶することを主題とした作品である。彼は次のように詠じている。

憶昔開元全盛日、小邑猶藏万家室	憶 ^{おも} う昔開元 全盛の日、小 ^{しょう} 邑 ^{ゆう} も猶お蔵す 万 ^{ばん} 家 ^か の室。
稻米流脂粟米白、公私倉廩俱豐実	稻 ^{とう} 米 ^{べい} は脂を流して 粟 ^{ぞく} 米 ^{べい} 白く、公 ^{こう} 私 ^し の倉 ^{そう} 廩 ^{りん} 俱 ^き に豊 ^{ほう} 実 ^{じつ} なり
九州道路無豺虎、遠行不劳吉日出	九州の道路に 豺 ^{さい} 虎 ^こ 無く、遠 ^{えん} 行 ^{こう} 勞せず 吉 ^{きち} 日 ^{じつ} に出 ^い ずるを
齐纨魯縞車班班、男耕女桑不相失	齐 ^{せい} 纨 ^{がん} 魯 ^ろ 縞 ^{こう} 車 ^{はん} 班 ^{ばん} 、男 ^{だん} 耕 ^{こう} 女 ^{じょ} 桑 ^{そう} 相 ^あ い失 ^し わ ^ず ず

（かつての開元の盛世を思うと、小さな県城にも一万戸を超える家があった。稲には脂のような光沢があり、粟も白い。官府も庶民も共に穀物を豊かに蓄えた。どこの道にも猛獣がおらず、人々は遠出するにも吉日を選ぶ必要がなかった。齐の絹や魯の白布を運んだ車が絶えず行き交った。男は耕作をしており、女は養蚕をしており、各自の職分を果たした。）

これらの詩句は、いずれも開元の盛世を讃えるものである。筆者は本論 1.1 節において、開元年間（713～741）における唐王朝の繁栄を論じる際にも、この詩の部分を引用した。杜甫は、開元年間の人口の多さ、民衆の豊かな生活、社会秩序の安定、その上に人々が勤勉に働く様子を生き生きと描いている。

詩は続けて、安史の乱勃発後に洛陽の宮殿が焼き払われる惨状を描き出す。最後には、代宗による唐王朝の再興への期待を込めて詩を結んでいる。

豈聞一絹直万錢 豈に聞かんや一絹 直万錢なるを

有田種穀今流血 田有り穀を種えしに 今血を流す。

洛陽宮殿焼焚尽 洛陽の宮殿 焼焚し尽し

宗廟新除狐兔穴 宗廟の新除 狐兔穴す

——略——

周宣中興望我皇 周宣の中興 我が皇に望む

灑淚江漢身衰疾 涙を江漢に灑いで 身衰疾なり

（一反の絹が一万錢の価に値するなど、かつて聞いたことがなかった。今、耕作に用いられる田畑は流血の戦場となり、洛陽の宮殿は反乱軍によって焼き払われた。新たに建てられた宗廟の階段には、狐や兎が巣を作っている。——略——代宗が周の宣王のように国家を再興されることを願いながら、私は蜀の地にあって力を尽くし、悲しみの涙を流すばかりである。）

特に注目すべきは、「憶昔二首」其二において、杜甫が安史の乱勃発時の惨状に言及しながらも、戦乱の原因すなわち玄宗の楊国忠への重用や楊貴妃への寵愛といった失政を述べていない点である。しかしながら、第一首では肅宗・代宗の失政が戦乱を招いたことを非難している。

この二首を合わせて考察すると、杜甫はまず乾元・上元年間の肅宗および広徳年間の代宗の失政によって再び引き起こされた戦乱を批判していることが分かる。そのうえで紙幅を費やして開元時代の繁栄と安定を描写している。彼は特定の時期における三人の皇帝の治世を取り上げ、その比較を通じて、末句の「周宣中興望我皇」に示されるように、代宗に開元時代を模範として当時の政治を正すように諫めるのである。したがって、「憶昔二首」は三人の皇帝を客観的に評価した作品というよりも、代宗に諫言せんとする意図を持つものと見なすべきであろう。

広徳二年（764）、杜甫は閬州録事韋諷の邸宅において、曹霸が馬を描く場面を目の当たりにした。曹

覇はすでに開元年間からその画技によって名声を博していた大家である。杜甫は「丹青引」（『詳注』巻十三）において、曹覇が詔によって御馬と凌煙閣^{りょうえんかく}二十四功臣の像を写し、玄宗から称揚された往事を回想する。

ところが詩の最後において、杜甫は一転して曹覇の現在の窮状を以下のように詠じている。

即今漂泊干戈際	^{そつこんひょうはく} 即今漂 泊す ^{かん か} 干戈の際、
屢貌尋常行路人	^{しば} 屢々 ^{えが} 貌く ^{じんじょう} 尋常 ^{こうろ} 行路の人
途窮反遭俗眼白	^{みちきゅう} 途窮して ^{かえり} 反て ^{ぞくがん} 俗眼の白きに遭う
世上未有如公貧	^{せじょう} 世上 未だ公の如く ^{まず} 貧しきは有らず

（今戦乱の世にあって、流浪の身となった曹覇はしばしば通行人を絵に描く。彼は困窮のうちにありながら、俗人から軽蔑された。この世に、曹覇ほど貧しい者はかつて存在しなかったであろう。）

曹覇の境遇の変化は杜甫自身の経験に似ている。彼らはいずれも玄宗時代に任用されたが、安史の乱から代宗時代に至るまで、各地を漂泊しながら貧困に苦しむ生活を送った。最後の句に示された曹覇への同情は、玄宗時代から代宗時代に至る唐王朝の衰退と、杜甫自身の境遇の変化に対する悲しみをも含むと言えよう。

なお、杜甫は「丹青引」を詠じると同時に、曹覇の馬図に関する詩「韋諷録事宅觀曹將軍画馬図歌（韋諷録事が宅にて曹將軍が画ける馬図を觀る歌）」（『詳注』巻十三）も残している。彼は詩の後半で天宝年間の往事を追憶して次のように詠じている。

憶昔巡幸新豐宮	^{おも} 憶う ^{じんこう} 昔巡幸 ^{しんぽうきゅう} す新豐宮
翠華拂天来向東	^{すい か} 翠華天を払いて来たりて ^{ひがし} 東に向かう
騰驤磊落三万匹	^{とうじょうらいらく} 騰驤磊落三万匹
皆与此図筋骨同	皆な此の図と ^{きんこつ} 筋骨同じ

自從獻寶朝河宗 寶を獻じ河宗を朝せしめしより
無復射蛟江水中 復た蛟を江水の中に射る無し
君不見金粟堆前松柏裏 君見ずや金粟堆前松柏の裏
龍媒去盡鳥呼風 龍媒去り尽くして鳥風に呼ぶを

（思えばかつて玄宗が新豊宮へ行幸した際には、翡翠の旗は天を払うように東へ向かった。その三万匹の駿馬は、全て曹覇の絵に描かれた馬のように逞しかった。玄宗は周の穆天子が西に行幸して河伯に宝物を献上させるように蜀の地に行幸した後、蛟龍を射ることは見られなかった。君は、玄宗の陵墓の金粟堆の松柏の陰に、もはや駿馬が去り、鳥が風の中で嘆いていることを見ないか。）

新豊宮は後に華清宮と名づけられる。第一句は、玄宗が天宝年間に驪山の新豊宮に行幸した際、その行列における車馬の壮麗さを描写している。

第三・四句において、杜甫は曹覇の描いた馬が、まるで玄宗時代の馬と同じように強壮であると詠じている。すなわち、これらの馬は戦乱を経て痩せ衰えた代宗時代の馬ではないのである。この句について『杜臆』は、馬の姿の変化を国家の興亡に喩え、そこに杜甫の胸中に潜む深い悲哀を読み取ることができる⁵⁸と評している。

さらに筆者は、この詩を前述の「丹青引」と併せて考察することで、杜甫の心境をより深く理解できると考える。すなわち、玄宗時代から代宗時代に至るまでの馬の姿の変化、馬を描いた曹覇の境遇の変化、そして目の当たりにした杜甫自身の経験——これら三つの事物はいずれも唐王朝の衰退を暗示しているものである。

第五・六句では、漢の武帝が潯陽江で蛟龍を射たとの典故が用いられる。ここで「蛟龍を射る者はない」とは、玄宗の崩御を意味する。

⁵⁸ 明・王嗣奭『杜臆』（中華書局、1963）199頁に「馬之盛衰、国之盛衰也。公閱此図、有不勝其痛者也」とある。

第七句の「金粟堆」は、玄宗の陵墓がある金粟山を指す。そこで駿馬が去り、風が動き、鳥が鳴いているという光景は、代宗が即位した後の社会の惨状を暗示している。その惨状について、杜甫は同年に詠じた「送韋諷上閬州録事参军（韋諷が閬州の録事参军に上るを送る）」（『詳注』巻十三）においても、次のように述べている。

国歩猶艱難、兵革未衰息 国歩 猶お艱難、兵革 未だ衰息せず
万方哀嗷嗷、十載供軍食 万方 哀しみて嗷嗷たり、十載 軍食を供す

（国の歩む道にはなお困難があり、反乱も未だ平定されない。どこでも民衆は悲しみの声をあげ、十年もの間、軍糧の供給に苦しめられている。）

天宝十四載（755）の安史の乱勃発から広徳二年（764）に至る十年間、民衆の穀物は軍需として徴収され、人々は飢餓に耐え忍ぶことを余儀なくされた。このような社会状況にあって、杜甫のみならず、おそらく他の民衆も玄宗時代を懐かしんだであろう。

三 永泰年間

永泰元年（765）、劍南節度使嚴武は没した。その後、郭英乂、崔旰は嚴武の後任をめぐって挙兵した。郭英乂が殺害されると、さらに瀘州の楊子琳と邛州の柏貞節が連合して崔旰を討伐した。このようにして蜀地は再び戦乱に陥り、杜甫を含む民衆の生活に影響を及ぼした。

杜甫は「懷錦水居止二首（錦水の居止を懷う二首）」（『詳注』巻十四）其の一において次のように詠じている。

軍旅西征僻、風塵戰伐多 軍旅 西に僻を征し、風塵 戦伐多きも
猶聞蜀父老、不忘舜謳歌 猶お聞く蜀の父老、舜を謳歌するを忘れざるを

（唐軍は西部の僻地である蜀の地に出征し、そこでは兵馬の行きかうために土埃は多い。それでも、蜀の父老たちはなお舜の徳を忘れずにその徳を謳歌している声が聞こえる。）

第一・二句は当時の崔旰の乱を指す。第三・四句について『詳注』は、民衆が玄宗による蜀地での統治を忘れず、それを懐かしむことを意味すると解している⁵⁹。

天宝十五載（756）六月、反乱軍が長安を陥落させると、玄宗は蜀の地へ避難した。至徳二載（757）十月に長安へ戻るまで、彼は約一年間にわたり蜀の地を統治していた。この期間、蜀の地は戦乱の影響を受けず、平和を維持していた。しかし、それは避難中の玄宗の統治に起因するものではなく、むしろ地理的条件によるものであった。蜀の地は山岳に囲まれた天然の要害であり、外敵の侵入が極めて困難であった。加えて、蜀の地は政治的・経済的利益に乏しかったため、反乱軍にとって侵攻の優先度が低かったのである。

第四句の「舜謳歌」の典拠は、『孟子』に由来する。『孟子』万章章句上において、堯が舜を天に推薦し、天が舜に政務を委ねたところ、舜が天下をよく治めたため、民衆が舜の治世を謳歌していたと記している⁶⁰。もしこの句を、杜甫が蜀の地における一年間の玄宗の統治を舜の治世と同等に見なしていると解釈すれば、それは史実とは相違する。筆者は、当時の蜀の地で戦乱が頻発していた社会情勢を踏まえると、杜甫が玄宗を舜に喩えるのは、誇張によって平和な時代への追慕の情を強調するためであったと考える。

以上、杜甫の代宗時代の作品における玄宗像を分析してきた。

吉川利一は、杜甫の作品には主に「三吏三別」をはじめとする客観的な叙事詩が多いが、一部の作品には「主観的要素」が混在していることを指摘する。たとえば、「秦州雜詩二十首」（『詳注』巻七）や同

⁵⁹ 『詳注』巻十四、1022 頁に「舜謳歌、玄宗曾幸蜀也」とある。

⁶⁰ 『孟子』万章章句上に「昔者堯薦舜於天而天受之……謳歌者，不謳歌堯之子而謳歌舜」とある。

谷における一連の紀行詩などがその例である⁶¹。筆者は、本節で分析した宝応―永泰年間における玄宗への追慕を主題とする杜甫の作品群も、肅宗・代宗時代を非難する「主観詩」として位置づけたい。

「憶昔二首」の第一首において、杜甫は肅宗が政務を李輔国、張皇后に委ねたこと、代宗が程元振を重用して郭子儀を遠ざけたことを強く批判している。特に、杜甫が「至今今上猶撥乱（今上をして猶お乱を撥め）」と詠じ、代宗の即位後もなお平定されなかった安史の乱の責任を肅宗に帰している。しかしながら、第二首では開元時代を称賛する一方で、天宝末年に玄宗が外戚楊国忠を重用し、楊貴妃と享樂に耽ったことによって安史の乱を招いたということには、直接言及していない。つまり、これは、杜甫が肅宗への強い不満を抱き、その思いを詠じたのであると考える。

その肅宗に対する不満は、本論 2.2 節で論じたように、乾元・上元年間の杜甫作品にも見られる。そして宝応・永泰年間に入ると、その傾向はますます明らかとなった。「憶昔二首」のみならず、「寄高適（高適に寄す）」（『詳注』巻十一）や「述古三首（古を述ぶ三首）」（『詳注』巻十二）といった作品にも、肅宗時代の失政への批判がよく見られる。したがって、「憶昔二首」における玄宗時代への追慕は、単なる懷旧ではなく、むしろ杜甫の肅宗以降の政治に対する不満を浮き彫りにするために詠じたものと考えられる。

注意すべきは、肅宗時代以降の政治への杜甫の批判が、彼自身の主観的な見解に基づくものであったという点である。「有感五首」其四において、杜甫は天宝末年に玄宗が皇子たちを地方に派遣して行政・軍事権を委ねたという政策を高く評価している。一方で彼は、肅宗が皇族の権力を抑制したことが、代宗時代における節度使の反乱を引き起こした一因であると考えていた。

しかし玄宗の政策は、各地を安定する上で一定の効果をもたらしたが、太子李亨（後の肅宗）以外の皇子たちにも過度な兵権を与える結果となった。肅宗の即位後、永王李璘が挙兵して反乱を起こしたことはその弊害の一例である。永王の乱は、速やかに鎮圧されたが、肅宗に皇室の権力拡大に対する警戒

⁶¹ 吉川利一『杜甫の遺産―人間の実存的探求』（杜甫研究〈第1輯〉、1965）149頁に「三吏三別をはじめ……客観叙事詩見られます。また秦州雜詩、同谷紀行……主観的要素の混入はほとんどいつもあります」という。

心を抱かせる契機となった。彼が玄宗のように皇族に権力を与えなかったのは、反乱を未然に防ぎ、当時の社会秩序を維持するための政策でもあったと言えよう。

この点から見ると、肅宗の政策をいかに評価すべきかはきわめて複雑な問題である。杜甫が批判的な態度を示したとしても、それは必ずしも正当な主張であるとは限らない。

さらに、第一章で分析した天宝時代の杜甫の作品、たとえば「同諸公登慈恩寺塔（諸公の慈恩寺の塔に登るに同ず）」（『詳注』巻二）や「自京赴奉先県詠懷五百字（京より奉先県に赴く詠懷五百字）」（『詳注』巻四）においては、杜甫は玄宗の驪山の遊樂を強く批判していた。しかしながら、この時期に詠じられた「韋諷録事宅觀曹將軍画馬図歌」では、玄宗が驪山の新豊宮を行幸した際の光景が、むしろ唐王朝の繁栄の象徴として描かれている。このような変化も、天宝時代と異なり、宝応―永泰年間の政治状況に対する杜甫の不満を反映している。

この時期の杜甫にとって、肅宗の政治に対する不満、戦乱頻発による社会秩序の崩壊、さらには自身の漂泊や困窮など、当時の現実は安定とは程遠いものであった。このような状況を踏まえ、かつて杜甫が強く批判した天宝時代でも、宝応―永泰年間の社会状況と比較すれば、良き時代として再評価されるのは決して不思議ではない。この点は、「懷錦水居止二首」其一において、杜甫が蜀の地における玄宗の統治を誇張し、舜の治世に喩えたことにも端的に示されている。これらの表現はいずれも、杜甫の玄宗時代に対する客観的な評価というよりは、むしろ相対的に安定していた天宝時代への追慕の情として理解すべきであろう。

3.2 杜甫の大暦年間（766～770）の作品における玄宗時代への回顧

永泰元年（765）の夏、杜甫は戦乱の続く蜀の地を離れ、大暦元年（766）の春に夔州（現在の中国重慶市奉節県）へ至り、そこで約三年滞在した。大暦三年（768）の秋、彼は弟の杜観と再会するために夔州を去って江陵へ向かった。その後、公安・岳陽・潭州・衡州などを経て、杜甫は再び長安へ帰ろうとしたが、大暦五年（770）に湘江を渡って襄陽に向かう途上で没した。

この五年間を顧みると、吐蕃はたびたび靈州（中国寧夏省銀川市）に侵入し、各地では兵馬使、節度使による反乱もひっきりなしに頻発した。これらの戦いにおいて唐軍はいずれも最終的には勝利を収め、前節で述べたような広徳年間の冬における国家の危機の状況には陥らなかったものの、唐王朝の権威の低下と国力の衰微は明らかであった。

杜甫にとって、夔州に滞在した約三年間は、戦乱の影響を受けることがほとんどなく、さらに夔州都督柏茂琳の援助を受けたことにより、安定した生活を送っていた。そのため、彼は創作に専念する余裕があり、大暦年間における作品の大半が夔州で創作されるに至ったのである。

この間、杜甫は詩体の革新を試み、たとえば呉体、俳諧体、口号体、さらに詩をもって伝記とする「八哀詩」などを創作した。また、その題材も多様である。社会批判詩にとどまらず、日常生活を描写した作品や、夔州周辺の名勝を詠じた作品、さらには咏史詩・懷古詩も含まれている。

とりわけ、玄宗に関する記述に注目すると、玄宗を称揚することによって相対的に肅宗・代宗の失政を風刺していた宝応―永泰年間の作品に対し、大暦年間の作品においては、玄宗の治世を回顧して深く省察する杜甫の姿勢がうかがわれる。以下に作品を詳しく見てゆきたい。

【開元時代への追慕】

大暦二年（767）、杜甫は「有嘆（^{たんあ}嘆有り）」（『詳注』巻二十一）において次のように詠じている。

壮心久零落、白首寄人間 ^{そうしん} 壮心 ^{れいらく} 久しく零落し、^{はくしゅ} 白首 人間に寄す

天下兵常鬪、江東客未還 天下 兵は常に鬪い、江東 客は未だ還らず
 窮猿号雨雪、老馬怯関山 窮猿 雨雪に号び、老馬 関山に怯る
 武徳開元際、蒼生豈重攀 武徳開元の際、蒼生豈に重ねて攀じんや

（私は政治への抱負を実現できず、今やすでに老境に入ってしまった。戦乱はいつまでも続き、私も故郷へ帰ることもできない。猿は雨雪の中で悲しげに叫び、老馬は帰途を阻む山々を前にして怯えている。民衆は、どうして武徳・開元のような時代へと戻ることができようか。）

詩の前六句は、大暦年間の杜甫の作品にしばしば見られる主題であり、すなわち、老境と病気に悩まされ、長安から遠く離れている自身の境遇への慨嘆と、各地で戦乱が止まない当時の社会状況への憂慮である。

詩の最後において、杜甫は高祖の武徳時代（618～626）と玄宗の開元時代とを掲げ、このような天下太平の治世にはもはや戻れないという深い悲しみを表明している。『杜詩闡』によれば、この句は、杜甫が武徳時代を唐王朝の繁栄の始点、開元時代をその終点として捉えていることを示すものである。つまり、杜甫にとって、玄宗の開元時代は、武徳以後の太宗、高宗・則天武後の治世に匹敵する時代であったのである⁶²。

確かに、杜甫の作品には、太宗の貞観時代（627～649）を懐古する詩句がよく見られる。例えば、本論 1.3 節で言及した「同諸公登慈恩寺塔（諸公の慈恩寺の塔に登るに同ず）」（『詳注』巻二）がその一例である。また、高宗・則天武後の治世（660～705）に対する追慕については、「贈蜀僧閻丘師兄（蜀僧閻丘師兄に贈る）」（『詳注』巻九）や「寄劉峽州伯華使君四十韻（劉峽州伯華使君に寄す四十韻）」（『詳注』巻十九）にも見られる。したがって、『杜詩闡』の解釈は適切であると言える。これは、玄宗・肅宗・代宗の三朝を経験した杜甫が、開元時代の玄宗を最も高く評価したことを示す一例である。

⁶² 清・盧元昌『杜詩闡』（台湾大通書局、1974）巻二十九に「武徳為唐治之始、開元為唐治之終。挙武徳開元、列宗皆在其中」とある。

【天宝時代への批判】

杜甫は大暦元年（766）に「解悶十二首」（『詳注』巻十七）を残した。其九から其十二までの四首では、荔枝を題材として玄宗と楊貴妃の奢侈な生活を批判している。

『唐国史補』によれば、楊貴妃は蜀の出身で、新鮮な荔枝を好んだという。玄宗は彼女を喜ばせるため、当時最も美味とされた南海産の荔枝を長安に運ばせたと記される⁶³。

まず、杜甫は其九において「先帝貴妃今寂寞、荔枝還復入長安（先帝貴妃今^{せきばく}寂寞、荔枝還^なお復^また長安に入る）」と詠じ、玄宗と楊貴妃の崩御後に至っても、その贅沢な風潮がなお広まっていたことを示している。其十において、杜甫は「京華応見無顔色、紅顆酸甜只自知（京華^{けいか}に^{まさ}顔色無きを見るべし、紅顆^{こうか}酸甜^{さんてん}只だ自ら知るのみ）」と詠じ、遠くの南海から都城へ荔枝を運ぶ以上、新鮮さが保たれるはずがないと述べ、こうした行為がいかに不合理であることを批判している。

さらに、杜甫は其十一において次のように詠じている。

翠瓜碧李沈玉甃	翠瓜 ^{すいか} 碧李 ^{へきり} 玉甃 ^{ぎよくしゅう} に沈められ
赤梨蒲萄寒露成	赤梨 ^{せきり} 蒲萄 ^{ぶどう} 寒露 ^{かんろ} に成 ^な る
可憐先不異枝蔓	可憐 ^{あわ} れむ可 ^し 先 ^し ず枝蔓 ^{しまん} と異なるざるを
此物娟娟長遠生	此の物娟娟 ^{けんけん} として長遠 ^{ちやうえん} に生ず

（瓜や李は井戸に沈めて冷やして食され、梨や葡萄は秋の寒露を受けて熟す。それらはいずれも荔枝に劣らぬ美味である。しかし、荔枝だけが遠く離れた地でしか実らないがゆえに、さらに人々から珍重されたのである。）

⁶³ 唐・李肇『唐国史補』（上海古籍出版社、1957）巻上、19頁を参照。

瓜・李・梨・葡萄などの果物は、荔枝と同様に食べれば美味である。それにもかかわらず、荔枝は長安から遠く離れた南方でしか生育しないという理由だけで、貴族から特別に珍重されたのであるという。ここで荔枝はもはや単なる果物ではなく、天宝年間における玄宗や楊貴妃らの奢侈な生活を象徴する存在となっていたことを示している。

最後の其十二に至って、杜甫は次のように詠じている。

側生野岸及江蒲	^{かたわ} 側らに生ず ^{や がん} 野岸と ^{こう ぼ} 江蒲とに
不熟丹宮満玉壺	丹宮に熟せずして ^{ぎよつ こ} 玉壺に満つ
雲壑布衣鮐背死	^{うんがく} 雲壑の ^{ふ い} 布衣 ^{たいはい} 鮐背にして死するに
労人害馬翠眉須	人を ^{つか} 勞れしめ馬を ^{そこ} 害ないて ^{すい び} 翠眉須 ^ま つ

（荔枝は本来、郊外の水辺や長江の岸辺にのみ生育するものであるが、今や大量に長安の宮中に蓄えられている。これは、市井の老人たちが命の危険を冒して採取してきたものにほかならない。玄宗は楊貴妃を喜ばせるために、荔枝を運ぶ者を疲弊させ、その馬も傷つけたのである。）

本来は野外でしか育たない荔枝は、宮中に大量に蓄えられていたという。杜甫はこの現象に対し、多くの官吏や馬が過重な労役を強いられ、荔枝を運んでいる際に命を落とす者さえいたことを指摘した。

もちろん、天宝年間におけるその「労人害馬」という行為は、荔枝を運ばせることに限らない。玄宗と楊貴妃は享樂のために華清宮を増築し、たびたび大規模な宴会を催した。こうした奢侈な生活が続くにつれて、下層の民衆は重税を納めざるを得なくなった。そのため、詩中における「労人害馬」は、玄宗が他者の命を顧みず、私的な欲望を満たすために民衆へ苦難を強いたことを象徴しているのである。

さらに、杜甫は大暦二年（767）夏の「又上後園山脚（又た^{こうえん}後園の^{さんきやく}山脚に^{のぼ}上る）」（『詳注』巻十九）において、玄宗の軍事政策を厳しく批判している。彼は次のように詠じている。

平原独憔悴、農力廢耕桑	平原 ^{へいげん} 独 ^{ひと} り憔悴 ^{しょうすい} し、農力 ^{こうりき} 耕桑 ^{こうそう} を廢す
非関風露凋、曾是戍役傷	風露 ^{ふうろ} の凋 ^{しぼ} ましむるに關するに非 ^{あら} ず、曾 ^{すなわ} ち是 ^こ れ戍役 ^{じゆえき} に傷 ^{そこな} わるるなり
於時国用富、足以守边疆	時に於 ^{おい} て国用 ^{こくよう} 富 ^ふ み、以 ^{もつ} て边疆 ^{へんきやう} を守るに足 ^{たり} る
朝廷任猛将、遠奪戎馬場	朝廷 ^{てうてい} 猛将 ^{もうしやう} に任せ、遠 ^{とほ} く奪 ^{うば} う 戎馬 ^{じゅうば} の場
到今事反覆、故老淚万行	今 ^{いま} に到 ^{いた} るまで 事 ^{こと} 反覆 ^{はんぷく} し、故老 ^{ころう} 淚 ^{なみだ} 万 ^{ばん} 行 ^{こう}

（平原の耕地が荒廢したのは、氣候によるものではなく、農民が兵士として徴用されたためである。

その時、国力は充実しており、国境を守る力は十分にあった。ところが玄宗は、安祿山らの猛将を任命し、唐軍に周辺諸国への侵攻を行わせた。それ以来、今日に至るまで、戦乱は絶えることがなかった。私はこのことを思うたびに涙を禁じ得ない。）

詩の冒頭では、徴兵によって耕作に従事する者がいなくなり、農地が荒廢するようになったという経済的危機が描かれている。続いて杜甫は、当時の唐王朝が盛んなので、戦争を起こす必要がなかったことを指摘する。詩中での「朝廷任猛将」は、玄宗の人材登用を称えるものではなく、むしろ安祿山などの武将の権力が拡大したことへの批判を含んでいる。さらに「遠奪戎馬場」の一句において、杜甫は「遠奪」という語を用いて、玄宗の領土拡張の野心を風刺している。

【開元時代と天宝時代との対比】

以上のように、杜甫は開元時代を盛世として高く評価する一方で、天宝時代における玄宗の失政も鋭く批判している。この両者の落差を踏まえ、大暦年間の杜甫はさらに開元時代と天宝時代の光景を対比し、玄宗の明君像の崩壊によって生じた唐王朝の変容と民衆の境遇の悪化を描き出している。以下、作品を詳しく見てゆきたい。

〈秋興八首〉

大暦元年（766）の秋、杜甫は名高い「秋興八首」（『詳注』巻十七）を詠じた。前の三首では、夔州に

おける物寂しい秋の風景を描き出すことによって、左遷のため都城を離れ、漂泊せざるを得なかった自身の境遇を嘆いている。他方、第四首においては、杜甫の視線は夔州から長安へと転じ、彼は玄宗時代以降の唐王朝の変遷をめぐって次のように詠じている。

聞道長安似弈棋 聞道く長安 弈棋に似たりと

百年世事不勝悲 百年世事 悲しみに勝えず

王侯第宅皆新主 王侯の第宅 皆な新主

文武衣冠異昔時 文武の衣冠 昔時に異なる

（聞くところによれば、長安の状況はまるで碁を打つように取ったり取られたりだそうである。百年の間に起こった出来事は、悲しみに耐えられないほどだ。かつての貴族の邸宅はいずれも主人が新しくなった。官僚たちの着物も、昔とはすっかり変わってしまった。）

長安城は、天宝十五載（756）六月に安祿山の反乱軍によって陥落し、広徳元年（763）の冬には再び吐蕃軍に占領された。最終的に唐軍は長安を回復したものの、このように占領と奪還が繰り返される状況は、碁を打って勝負を争うことに似ていると言えよう。もっとも、囲碁の勝負が単なる碁盤における変化に過ぎないのに対し、戦争における勝敗は民衆の生活に甚大な被害をもたらしたのである。

続く第五首において杜甫は、天宝十載（751）に「三大礼賦」を献じて集賢院に召されたことを回想し、各地を漂泊する今の自身の境遇と対比している。第七首と第八首では、昆明池・上林苑・漢陂などの名勝が戦乱によって荒廃し、往時の風景を再び見ることができなくなったことに対する深い悲哀が表現されている。とりわけ、第六首において、杜甫は玄宗の変化を指摘して次のように詠じている。

瞿唐峡口曲江頭 瞿唐 峡口と 曲江の頭と

万里風煙接素秋 万里の風煙 素秋に接す

花萼夾城通御氣 花萼の夾城 御氣通じ

芙蓉小苑入辺愁	芙蓉 ふよう の小苑 しょうえん 辺愁 へんしゅう 入る
珠簾繡柱困黄鵠	珠簾 しゆれん 繡柱 しゅうちゅう 黄鵠 こうこく を囲み
錦纜牙檣起白鷗	錦纜 きんらん 牙檣 がしょう 白鷗 はくおう を起たす
回首可憐歌舞地	首 こうべ を回らせば 憐 あわれ む可し歌舞の地
秦中自古帝王州	秦中 しんちゅう は 古 いにしえ より帝王の州

（瞿唐峡の入口と曲江のほとりとは、遠く離れているが、同じように秋の風が吹き渡る。花萼楼から夹城を通して皇帝の気配が行き渡り、辺境の戦場からの殺伐の気が芙蓉園にまで入り込む。華麗な宮殿には黄鵠が集まり、曲江には御舟が動いて白鷗が舞い上がる。昔のことを振り返ると、長安は古来より帝王の居所であったにもかかわらず、安史の乱で陥落したこともあった。また、遊樂の場であった曲江は、今も荒廃したままである。こうしたことを思うと、悲しみを禁じ得ない。）

冒頭の二句では、遠く隔たる夔州の瞿唐峡と長安の曲江がともに物寂しく描かれ、玄宗時代における長安の栄光もすでに過去のものになったことが示されている。

第四句の「芙蓉小苑入辺愁」は、安史の乱勃発の報が、玄宗の遊樂の場所であった芙蓉園にまで届いたことを意味する。これは、天宝年間における玄宗が太子や韋見素らの諫言を受け入れず、享樂に耽って安祿山の野心に対する警戒を怠ったことを風刺したものである。

しかしながら、前の第三句の「花萼夾城通御氣」の意味については、諸説が存在する。

「花萼」とは「花萼相輝楼」を指す。開元八年（720）、「花萼相輝楼」と「勤政務本楼」は興慶宮の内に建てられた。そして玄宗は興慶宮で政治を行う一方、頻繁に楊貴妃と花萼楼へ出かけて遊んでいた。

『詳注』『杜詩説』『杜臆』などは、本句を開元年間の玄宗が興慶宮で政務を執ることを指すものと解する。その勤勉さと、第四句に描かれる芙蓉園で享樂に耽っていた姿を対比させることで、玄宗の君主像の変化を示すという⁶⁴。

⁶⁴ 葉嘉瑩『杜甫秋興八首集説』（上海古籍出版社、1988）373～380頁を参照。

一方、当時、花萼楼から夾城を通して曲江の芙蓉園に至ることができたため、『杜詩鏡銓』は、第三句も第四句と同様に、玄宗が長安城で遊んでいた場面を描いたと解釈する⁶⁵。さらに『杜詩提要』においても、杜甫はこの二句を対比させたのではなく、「互文」の表現方法を用いたと考えている⁶⁶。

筆者は、「秋興八首」における長安を詠じた諸篇は、いずれも対比の表現方法が用いられている点を踏まえると、第三句と第四句が玄宗の政務に励んでいた姿と、後に享樂に耽るようになった姿との対比であるという『詳注』・『杜臆』の解釈が適切であると考え。とはいえ、楊倫、吳瞻泰らの見解も、政務に怠った玄宗の失政を強調する点で『詳注』・『杜臆』と一致している。

〈観公孫大娘弟子舞剣器行〉

大暦二年（767）十月九日、杜甫は夔州別駕元持の邸において李十三娘の剣舞を目にした。李十三娘の師は公孫大娘であり、杜甫はこのことを知ると、開元三年に公孫大娘の剣舞を觀賞したことを回想し、「観公孫大娘弟子舞剣器行（公孫大娘の弟子の剣器を舞うを觀るの行）」（『詳注』卷二十）を詠じた。杜甫はそこで「先帝侍女八千人、公孫剣器初第一（先帝の侍女八千人、公孫の剣器初めより第一）」と詠じ、続けて開元年間に玄宗が催した宴会における剣舞の場面を描写している。さらに杜甫は「金粟堆南木已拱、瞿唐石城草蕭瑟（金粟堆南木已に拱たり、瞿唐の石城草蕭瑟）」と詠じ、安史の乱によって引き起こされた長安の荒廃を描き出している。玄宗の陵墓における物寂しさと、かつての宴会の場面とを対比させることで、天宝末年以降の唐王朝の衰微を象徴的に示しているのである。そのため、『杜臆』は、詩中で剣舞を詠じているが、実際には玄宗を追憶していると指摘している⁶⁷。『詳注』もまた、「全ては開元・天宝五十年にわたる唐王朝の変容を慨嘆するものである」と評している⁶⁸。

⁶⁵ 清・楊倫『杜詩鏡銓』（上海古籍出版社、1981）卷十三に「二句言以御氣所通、即為辺愁所入」とある。

⁶⁶ 清・吳瞻泰『杜詩提要』（黄山書社、2015）卷十二に「三、四交互句。言盛時花萼城、芙蓉苑皆通御氣、衰時芙蓉苑、花萼城皆入辺愁」とある。

⁶⁷ 明・王嗣夷『杜臆』（中華書局、1963）卷九、340頁に「情事俱属玄宗、知其意不在剣器也」とある。

⁶⁸ 『詳注』卷二十、1498頁に「詠公孫、却憶先帝。全是為開元天宝五十年治乱興衰而発」とある。

〈江南逢李龜年〉

大暦三年（768）、杜甫は夔州を離れて潭州に至り、開元時代にすでに名を馳せていた楽人李龜年と再会した。そこで彼は名高い「江南逢李龜年（江南にて李龜年に逢う）」（『詳注』巻二十三）を作り、次のように詠じている。

岐王宅裏尋常見	岐王の宅裏 尋常に見
崔九堂前幾度聞	崔九の堂前 幾度か聞く
正是江南好風景	正に是れ江南の好風景
落花時節又逢君	落花の時節又た君に逢う

（かつて私は、岐王の邸宅及び崔九の家で、君の歌声を何度も耳にしたものである。現在の江南はまさにすばらしい光景に満ちているが、花の散る潭州で再び君と出会うことになった。）

第一句の「岐王」とは皇族の李範を指し、第二句の「崔九」は高官の崔滌を指す。この二人はいずれも開元十四年に没した。

杜甫は詩の前二句において、開元年間、李龜年が長安において貴族や高官らの前で演奏していたことを回想している。後の二句では、大暦年間において杜甫自身と同じく漂泊の境遇にある李龜年と、僻地の潭州で再会したことを慨嘆しているのである。

『杜詩説』は、この詩を、上述の「観公孫大娘弟子舞剣器行」と同様に、開元の盛世から衰微へと向かった唐王朝の歩みに対する杜甫の深い悲嘆を表現したものと指摘している⁶⁹。すなわち、「剣器行」と「江南逢李龜年」の二首は、いずれも玄宗の姿そのものを直接描写するものではないが、開元年間の事物への回想を通して、唐王朝の衰微と自らの境遇の変化への悲しみとを表現しているのである。この変

⁶⁹ 清・黄生『杜詩説』（黄山書社、2014）巻十、390頁に「此詩與『剣器行』同意、今昔盛衰之感……」とある。

化をもたらした要因が、天宝年間における玄宗の失政であることは言うまでもない。

〈千秋節有感二首〉

上述の大暦元年の「秋興八首」其の六および「洞房」八首連作と同様に、杜甫は大暦四年（769）八月の「千秋節有感二首（千秋節に感有り二首）」（『詳注』巻二十二）においても、開元時代と天宝時代を対比している。第一首では、杜甫は次のように詠じている。

自罷千秋節、頻傷八月來 千秋節を罷めしより、頻りに八月の来るを傷む

先朝常宴会、壯觀已塵埃 先朝常に宴会あり、壯觀已に塵埃なり

（千秋節が取りやめられて以来、八月になるたびに私は深く悲しんでいる。玄宗時代にしばしば催された盛大な宴会の光景は、今やすでにちりほこりと化して過去のものとなった。）

『冊府元龜』によれば、玄宗は開元十七年（729）八月五日、すなわち四十四歳の誕生日に宴会を催した。その後、毎年八月五日が「千秋節」と定められるようになった。この日、官僚・貴族が銅鏡と承露囊を献上して祝意を示した。一方、民間では三日の休暇が設けられ、互いに銅鏡を贈り合う風俗も広まった⁷⁰。このような光景は、開元時代の唐王朝における経済の繁栄、社会の安定、国力の充実を象徴するものであった。

続く第二首において、杜甫は次のように述べている。

御氣雲樓敞、含風綵仗高 御氣 雲樓に敞く、風を含みて 綵仗高し

仙人張内楽、王母献宮桃 仙人 内楽を張り、王母 宮桃を献ず

羅襪紅蕖艷、金羈白雪毛 羅襪 紅蕖艷に、金羈 白雪の毛あり

⁷⁰ 宋・王欽若『冊府元龜』（清華書局印行）巻二を参照。

舞階銜寿酒、走索背秋毫　　階に舞いて^{じゆしゆ}寿酒を^{ふく}銜み、^{きく}索を^{はし}走りて^{しゅうごう}秋毫に^{はい}背す

聖主他年貴、辺心此日勞　　聖主^{せいしゆ} 他年^{たうと} 貴く、^{へんしん} 辺心　此の^{ろう}日勞す

（玄宗が高樓に登ると、儀仗の旗は風になびき、梨園の楽工は宮廷の楽曲を演奏し、楊貴妃は寿桃を献じ、宮女たちは華やかな衣装を身につけて綱渡りを行った。金色の羈をつけた白馬は、階段で舞いながら口に銜えた杯を玄宗に向けていた。玄宗が誕辰を祝うその一方で、私は辺境の情勢を憂えていたのである。）

『詳注』によれば、「王母献宮桃」とは楊貴妃を指すという⁷¹。楊貴妃は天宝四載以前には道観で修行し、天宝四載八月に貴妃に封ぜられたため、ここで描かれている場面は天宝年間の千秋節を指すものと理解すべきである。前四句に描かれた舞馬・綱渡り・歌舞といった場面は、前述の「斗鷄」にもすでに見られる。杜甫はここでも玄宗が奢侈な生活に耽溺していたことを風刺しているのである。

ただし、『杜臆』は、第二首に描かれている宴会の場面は、必ずしも千秋節に限らず、むしろ天宝年間における玄宗の享樂そのものを指すと解している。詩の最後に詠じられた「辺心此日勞」は、玄宗が享樂に耽って政務を怠った結果、安史の乱を招いたことを暗示しているのであるという⁷²。

このように、第一首では開元年間の千秋節が盛世の象徴として追慕されているのに対し、第二首では天宝年間の千秋節が玄宗の失政の象徴として批判されている。

〈洞房〉八首連作

大暦年間において、杜甫は『詩経』に倣い、詩の冒頭の二字を題名として「^{どうぼう}洞房」「^{しゆくせき}宿昔」「^{のうが}能画」「^{とうけい}鬪鷄」「^{れきれき}歴歴」「^{らくよう}洛陽」「^{りざん}驪山」「^{ていほう}提封」の八首の五言律詩を作った。この連作は年代順によって、玄宗による唐王朝の衰微の過程を述べている。

⁷¹ 『詳注』巻二十二、1647 頁に「太真（楊貴妃）献桃」とある。

⁷² 明・王嗣奭『杜臆』（中華書局、1963）巻十、377 頁に「感昔年之樂召後日之悲」とある。

第一首である「洞房」は大暦元年（766）の秋に詠じられた。この時、楊貴妃はすでに没し、玄宗も泰陵に葬られていた。長安の宮殿における寂しさが心に浮かぶと、玄宗時代に関する杜甫の記憶が蘇ったのである。そして、彼は続く諸篇において、玄宗時代の終焉をもたらした天宝年間の失政を回顧している。

第二首「宿昔」は、玄宗が女色に耽溺したことを風刺する作品である。杜甫は次のように詠じている。

宿昔青門裏、蓬萊仗數移	宿昔 青門の裏、蓬萊 仗數々移る
花嬌迎雜樹、龍喜出平池	花嬌めかしくして 雜樹迎え、龍 喜びて 平池より出ず
落日留王母、微風倚少兒	落日 王母を留め、微風 少兒に倚る
宮中行樂秘、少有外人知	宮中行樂の秘、外人の知る有る少なり

（かつて興慶宮から曲江へと行幸する際、玄宗の車駕はたびたび長安城の東門を通った。牡丹の花は玄宗を迎え、龍池の龍も喜んで飛び出してきた。玄宗は、西王母のような楊貴妃と、衛少兒のような秦国・虢国夫人とともに遊興していた。その行樂の光景については、宮殿の外にいる者にはほとんど知られていなかった。）

「蓬萊仗」は皇居の守衛及び儀仗の任に当たった兵士を指す。冒頭の「蓬萊仗數移」とは、玄宗の車駕がしばしば移動するさまを描き、政務を怠って行樂に耽ったことを暗示している。

第三句では、楊貴妃を「王母」に、秦国夫人・虢国夫人を「少兒」に喩えている。楊貴妃はもともと玄宗の子・寿王李瑁の妃であった。秦国夫人と虢国夫人は楊貴妃の姉妹であり、いずれもすでに嫁いでいた。しかし玄宗は女色を好み、この三姉妹を宮中に留めてともに遊樂したのである。このような倫理に背く君主の行為に対して、詩の最後において、臣下である杜甫はそれ以上筆を加えることは忍びなかったであろう。『杜臆』によれば、最後の句は、玄宗の倫理に反する行為がすでに世間で広く知られ

ていたにもかかわらず、玄宗本人はそれを知らなかったと評している⁷³。

さらに、玄宗は晩年になると、政務よりも芸能や遊戯に心を奪われるようになった。これに対し、杜甫は第三首「能画」において次のように詠じている。

能画毛延寿、投壺郭舍人 能画の毛延寿、投壺の郭舍人

每蒙天一笑、復似物皆春 毎に天の一笑を蒙り、復た物の皆な春なるに似たり

（かつては、毛延寿のように絵画が上手な者や、郭舍人のように投壺に長じた者がいた。玄宗が彼らの芸によって笑いを誘われるたびに、すべては春のようになったのである。）

晋の葛洪『西京雜記』によれば、漢の武帝の画工の毛延寿はその画技に優れ、郭舍人は竹製の矢を壺に投げ入れる投壺の名手であり、いずれも武帝の寵愛を受けたと記している⁷⁴。杜甫はこの典故を借りて、当時の芸能や遊戯に秀でた者たちが皇帝の側近として特別な地位を得ていたことを暗示している。

儒家思想の政治理念の一つとして、国家の安定と繁栄は、徳と才能を兼ね備えた人材の登用にかかっている⁷⁵。ところが、玄宗がそれに反して芸人を重用したことに対し、杜甫は「能画」詩の後半で直截に批判して次のように詠じる。

政化平如水、皇明断若神 政化平らかなこと 水の如く、皇明断ずること 神の若ければ

時時用抵戯、亦未雜風塵 時時用て戯に抵つるも、亦た未だ風塵を雜えざらん

（もしその時、政治が水のように公平であり、皇帝が神明のごとく正しい決断を下していたならば、たとえ絵画や投壺などの遊びが頻繁に行われていたとしても、戦乱を招くことはなかったであろ

⁷³ 明・王嗣奭『杜臆』（中華書局、1963）259 頁に「曰『行楽秘』、必有不可聞于外人者、然醜声聞于外、人皆知之而帝不知也」とある。

⁷⁴ 晋・葛洪『西京雜記』（中華書局、1985）卷二、卷五を参照。

⁷⁵ 『礼記』礼運篇に「大道之行也、天下為公。選賢与能」とある。

う。)

杜甫はここで仮説を立てる。すなわち、もし玄宗は開元時代のように物事の良し悪しを判断できれば、たとえ芸人などを重用したとしても、社会の安定を損なうことはなかったであろう。しかし実際には、天宝年間の玄宗は臣下の諫言よりも伶人の諂言を喜んで受け入れた。ここで杜甫が批判しているのは芸人たちではなく、むしろお世辞に耽溺した玄宗自身であると言えよう。

次の「闘鷄」において、杜甫は天宝時代における玄宗の放逸な生活と安史の乱後の驪山の荒廃と対比している。続く「歴歴」「洛陽」「驪山」の三首においては、平和な玄宗時代から一転し、玄宗が天宝十五載に蜀地へ逃亡したこと、肅宗の至徳二載に長安へ戻ったこと、そして代宗の宝応元年に崩御したことがそれぞれ描かれている。以下では「歴歴」を例に取り上げ、杜甫の開元時代から天宝末年への変遷に対する悲哀の情を見よう。彼は次のように詠じる。

歴歴開元事、分明在眼前	歴歴 ^{れきれき} たり開元の事、分明 ^{ぶんめい} にして眼前 ^{がんぜん} に在り
無端盜賊起、忽已歲時遷	端 ^{はしな} 無くも盜賊 ^{とうぞく} 起こり、忽 ^{たちま} ち已 ^{すで} に歲時 ^{さいじ} 遷 ^{うつ} る
巫峽西江外、秦城北斗辺	巫峽 ^{ふきよう} は西江 ^{せいこう} の外 ^{そと} 、秦城 ^{しんじよう} は北斗 ^{ほくと} の辺 ^{へん}
為郎従白首、臥病数秋天	郎 ^{ろう} と為りて白首 ^{まか} に従 ^{やま} せ、病 ^{やま} いに臥 ^ふ して秋天 ^{しゅうてん} を数 ^{かず} う

(開元時代の往事が、目の前にあるかのようにはっきりと思い浮かぶ。しかし、理由もなく安史の乱が勃発したことによって、かつての栄光はすでに過去のものとなった。私は今、長安から遠く離れた夔州において、老境と病気に苦しみながら秋を過ごしている。)

『詳注』によれば、杜甫は冒頭の「歴歴開元事」によって前の三首「宿昔」「能画」「斗鷄」に描かれた太平の世における享樂の光景を総括し、第二句の「無端盜賊起」を契機として、続く三首「洛陽」「驪

山」「提封」において安史の乱後の社会状況を描写しているという⁷⁶。

しかし筆者は、「歴歴開元事」は単に享楽を回顧するだけでなく、当時の政治状況をも内包していると考え。すなわち、前掲の「能画」において詠じられた「政化平如水、皇明断若神」という、開元年間における公平な政治と賢明な君主としての玄宗の姿も、また「歴歴開元事」に含まれていると見なすべきである。

本詩は冒頭において、杜甫が開元から天宝初期にかけての経済的繁栄と政治的安定を追憶し、開元時代の物事を回想している。しかし過去の栄光は、詩の最後に示される杜甫自身の老境と病氣、さらには唐王朝の衰微の現実と対比している。この変化の背後にあるのは、玄宗の明君像の崩壊によって引き起こされた安史の乱にほかならない。これは『詳注』が指摘するように、「天宝末年の社会危機は、実際には玄宗の失徳によってもたらされたのである。ここでの『無端盜賊起』という語には、玄宗への婉曲な批判が含まれている」のである⁷⁷。ただ「詳注」は「無端」を婉曲な批判というが、果たしてそうだろうか。「無端（理由もなく）」という語には、辛辣な皮肉が込められていると見るべきではないか。というのも連作の「宿昔」「能画」で杜甫が指摘したことを踏まえれば、この「歴歴」では、玄宗の失策によって安祿山の乱が引き起こされたと詠じていることは明らかだからである。

最後の「提封」において、杜甫は玄宗の失政を総括して次のように詠じる。

提封漢天下、万国尚同心	提封 ^{ていほう} す漢の天下、万国尚お心を同じくす
借問懸車守、何如儉德臨	借問 ^{しゅもん} す懸車 ^{けんしや} もて守るは、儉德 ^{けんとく} もて臨 ^{のぞ} むに何如 ^{いかん} と
時徴俊乂入、莫慮犬羊侵	時に俊乂 ^{しゅんがい} を徴 ^め して入らしめ、犬羊 ^{けんよう} の侵 ^{おか} すを慮 ^{おも} る莫 ^な かれ
願戒兵猶火、恩加四海深	願わくは兵は猶お火のごときを戒 ^{いまし} め、恩 ^し の四海 ^{かい} に加わるの深からん
	ことを

⁷⁶ 『詳注』巻十七、1260 頁に「前三章説承平之世、故以開元事括之。後三章説乱離之後、故以盜賊起包之」とある。

⁷⁷ 『詳注』巻十七、1260 頁に「天宝之乱、皆明皇失徳所致、此云『無端盜賊起』、蓋諱言之耳」とある。

（かつて漢王朝は天下泰平であった。その平和が維持されたのは、軍隊を派遣して辺境を守ったからではなく、むしろ君主が儉約の徳を守り、民衆の利益を保護したためである。当時、もし賢臣に登用していれば、戦乱は勃発しなかったであろう。今は、戦争が再び起こらず、人々が安定した生活を送ることを願うばかりである。）

詩の前半において、杜甫は社会が安定していた漢王朝を例として、君主の儉約の徳こそが社会の安定を維持する根本であることを強調する。しかし、天宝末年の玄宗は宮殿を増築し、たびたび宴会を催すなど、民衆の税収に依存する唐王朝の財力を著しく損なった。これらの行為は、まさに儉約の徳に背くものであった。

詩の後半では、杜甫は玄宗の領土拡張を目指した軍事政策、すなわち兵力の損失を顧みず吐蕃など周辺諸国に侵攻したことを批判している。この時期、玄宗は張九齡らの諫言を受け入れず、安祿山ら武將に過度の兵権を与えたのみならず、民間における徴兵も拡大したのである。

前述のように「洞房」八首連作について、『杜詩説』は「美惡不掩（功績だけでなく過失も覆い隠さない姿勢）」と評している⁷⁸。筆者は、この評価を杜甫の大暦年間の作品における玄宗に関する記述にも当てはめることができると考える。

いわゆる「美」の側面とは、言うまでもなく、国をよく治めた開元年間の玄宗の姿を指す。

「洞房」八首連作の「能画」には「政比平如水，皇明断若神」と詠じられ、「秋興八首」には「花萼夾城通御氣」というように、杜甫は開元時代における玄宗の明君像を描き出している。また、前掲の「有嘆」においては、玄宗の開元時代が高祖の武徳時代や太宗の貞観時代に匹敵する治世と描かれ、杜甫の開元時代に対する高い評価が示されている。

こうした政治的評価に加えて、開元の盛世を回想する描写も見逃せない。「洞房」八首連作の「歴歴」

⁷⁸ 清・黄生『杜詩説』（黄山書社、2014）巻七、272 頁に「八章専述開元以来之事、借古喻今、美惡不掩」とある。

には「歴歴開元事、分明在眼前」というように、唐王朝の繁栄を懷古する情が示されているだけでなく、前掲の「劍器行」や「千秋節有感二首」などにおいても、国力の充実を象徴する開元時代の宴会の場面が描き出されている。

他方、玄宗の「悪」の側面に関して、杜甫は主として二つの観点から論じている。

第一に、「洞房」八首連作の「宿昔」「能画」「斗鷄」や「解悶十二首」などにおいて、天宝年間の玄宗が享樂に耽溺した様子が描かれ、それが政治的混乱を招いたことが指摘されている。

第二に、「洞房」八首連作の「提封」と同様に、「又上後園山脚」においては、玄宗の軍事政策の弊害、すなわち戦時における民衆への過重な負担と安祿山ら武将の勢力の拡大が示されている。

したがって、『杜詩説』における「美惡不掩」とは、開元年間における玄宗の明君像と、天宝年間における玄宗の暗君像とが「洞房」八首連作の中に併存しているのである。すなわち、杜甫は開元時代への追慕を抱いていたにもかかわらず、天宝年間における玄宗の失政を決して覆い隠すことはなかったのである。このような客観的姿勢は、前節で論じた杜甫の宝應・広徳・永泰年間の作品とは異なる特徴を示していることが明らかであろう。

大暦年間の前後における杜甫作品を比較すると、玄宗像の描き方が主観的なものから客観的なものへと移行していることがうかがわれる。筆者は、この変化を、杜甫の詩の機能が「怨」から「観」へと拡張したと考えている。

孔子は『論語』陽貨篇において、『詩経』の四つの機能として、「興・観・群・怨」を挙げている⁷⁹。これらの概念は、後世においても詩歌の機能として広く受け継がれてきた。

「興」は詩の抒情的機能を指し、「群」は詩を通じて思想や文化を共有・交流する機能を指す。この二つの機能は、多くの詩に共通して見られる基本的な特質である。

「怨」については、孔安国は「怨刺上政」と注釈している⁸⁰。すなわち、君主を風刺し、政治の不正を

⁷⁹ 『論語』陽貨第十七に「子曰、小子、何莫学夫『詩』。『詩』可以興、可以観、可以群、可以怨」とある。

⁸⁰ 『論語注疏』（北京大学出版社、1999）237頁。

指摘するという詩の批判的機能を意味する。肅宗の至徳年間から代宗の永泰年間にかけて、杜甫が玄宗・肅宗・代宗の三帝を対比しつつ君主の不正を風刺した表現は、まさに「怨」という詩の批判的機能を体现するものである。こうした作品に反映された杜甫の批判意識は、同時期に詠じられた社会批判詩、たとえば「三吏三別」においても顕著に認められる。

一方、「観」については、鄭玄が「観風俗之盛衰（風俗の盛衰を観る）」と注し⁸¹、朱熹は「考見得失（得失を考察する）」と解釈している⁸²。すなわち「観」とは、詩が社会現実の変化を客観的に映し出し、政治における功績と過失とを省察する機能を指すものである。この「観」の機能は、杜甫の大暦年間の作品において、玄宗時代を回顧しつつ玄宗の得失を省察する、言わば「君主を観る」との客観的姿勢に表れている。

李芳民は、「（杜甫の夔州期の詩）が単なる過去の回想しているものではなく、詩をもって国家の盛衰の原因を究明しようとする」という杜甫の夔州期の作品の特徴を指摘する⁸³。その「国家の盛衰の原因を究明する」という詩の歴史的価値は、大暦年間の作品における玄宗に関する記述に顕著に表れる。すなわち、杜甫は歴史家の視点から、開元時代における玄宗の明君像と天宝時代における暗君像を切り分け、唐王朝が興隆から衰退へと至る歴史的過程を回顧している。これにより、君主の賢明さが社会の安定と深く結びついているという歴史の教訓が示されているのである。

以上のように、杜甫の作品における玄宗像の描き方が、主観的な「怨」から客観的な「観」へと変化していることは、杜甫の詩の歴史的価値が深化していく過程を反映していると言えるであろう。

⁸¹ 『論語注疏』（北京大学出版社、1999）237 頁。

⁸² 宋・朱熹『四書章句集注』（中華書局、1983）178 頁。

⁸³ 李芳民『杜甫晩年の家国情懷与詩歌芸術創新——以寓居夔州之初的詩歌創作為中心——』（復旦學報、2022 第 2 期）に「他在詩中……力圖通過詩歌敘事，追溯国家盛衰之變的原因」という。

終章

以上、玄宗・肅宗・代宗の三代にわたる杜甫の作品を考察してきた。この考察を通して、杜甫の作品における玄宗像は、おおよそ次の三段階の変化を示すと考えられる。

まず、杜甫の玄宗時代の作品においては、開元年間の明君としての玄宗像と、天宝年間の暗君としての玄宗像とが混同している。すなわち、天宝末年に至ってなお、杜甫は玄宗を「堯舜君」と称し、開元時代の玄宗と同様に唐王朝を盛んにする明君として位置づけている。

その後、肅宗の至徳年間から代宗の永泰年間にかけての杜甫の作品において、彼は開元時代もしくは天宝時代の玄宗像を取り上げ、それを肅宗像・代宗像と対比していることによって、肅宗と代宗の政治状況を称揚あるいは批判するという目的を達成している。この時期に描かれる玄宗像には、杜甫の主観的判断が介在していると考ええる。

しかし晩年、代宗の大暦年間に入ると、杜甫は開元時代と天宝時代という二つの治世を明確に切り分け、いわば歴史家のような視点から玄宗の功績と過失とをそれぞれ論じることで、玄宗像を客観的に描き出すようになったのであった。

本章では、杜甫の作品における玄宗像の変化を手がかりとして、そこに反映された杜甫の忠君意識の変容を分析したい。

一 玄宗時代における矛盾した玄宗像と杜甫の「忠君」

本論 1.1 節で論じたように、杜甫は名門の家に生まれ、玄宗が国をよく治めた開元の盛世のもとで成長した。儒家思想の影響を強く受けた杜甫は、仕官への志を抱いて天宝四載（745）に長安へ入り、官途を求めたのである。本論 1.2 および 1.3 節で指摘したように、天宝時代の杜甫の作品には玄宗の失政を批判するものも見られるが、全体としては皇帝や顯貴への賛辞に満ちた干謁作品が多数を占めている。

さらに重要なのは、本論 1.4 節で分析した天宝末年の「自京赴奉先県詠懷五百字」において、杜甫は玄宗の失政を鋭く批判している一方で、玄宗を「堯舜君」と称し、玄宗による唐王朝の再興への期待を

表明するとともに、その失政の責任を大臣たちに転嫁している点である。筆者は、こうした姿勢から、当時の杜甫が仕官への志を依然として持っていたことがうかがえると考える。

「堯舜君」などの語に見られる玄宗像への美化について、葛曉音は、君主をこのように理想化することは当時の文人に広く見られる一般的現象であり、すなわち李白や杜甫をはじめとする安史の乱以前の文人たちは、玄宗による唐王朝の再興を期待するあまり、作品において玄宗の失政を大臣の過失に転嫁することがしばしば見られると指摘し、杜甫の立場を弁護している⁸⁴。

しかしながら、このような仕官の志に基づく玄宗像の美化に対しては、批判的な見解も少なくない。例えば、黄雅莉は、杜甫の干謁作品について、それが彼自身の写実主義的詩風から逸脱しているのみならず、詩人が備えるべき高潔な人格とも齟齬すると批判している⁸⁵。さらに、アメリカの学者宇文所安は、杜甫を「帝国秩序的頌揚者」（封建社会の秩序を讃美する人）と位置づけている⁸⁶。なお、張忠綱の研究によれば、現代中国における文化大革命期には、杜甫の忠君意識を「愚忠」と断じる見解が数多く見られたという⁸⁷。

筆者は、以上のように杜甫の「忠君」を批判する評価は、やや一面的であると考え。というのも、玄宗時代以降の杜甫の作品における玄宗像の変化を踏まえて考察すれば、杜甫は必ずしも君主に盲目的に忠誠を尽くす人物ではないからである。さらに、玄宗時代の作品のみに限定した場合、杜甫が仕官を目指して君主を称揚し、その過失を弁護するという姿勢には、封建社会の士大夫に広く共通する忠君意識が明確に反映されている。したがって、現代社会の価値観から見れば、この時期の杜甫の忠君意識は批判の対象となるが、当時にとっては多くの文人に共通する意識であったと考えられる。

⁸⁴ 葛曉音「略論杜甫君臣觀的轉變」（『中州学刊』、1983年第6期）「在安史之乱以前、杜甫和大多数盛唐文人一樣……象李白、杜甫這些對現實認識比較清醒的詩人也仍然存在着希望玄宗更新政治的幻想……也就難免對君有所回護、將政治弊病都歸結于臣的失責」という。

⁸⁵ 黄雅莉「杜甫長安時期的干謁詩探究」（『中国韻文学刊』、2017）に「干謁之詩……扭曲自己的創作個性，這不但有違詩人高潔的人格……」という。

⁸⁶ 宇文所安『盛唐詩』（賈晋華訳、生活・読書・新知三聯書店、2004）210頁。

⁸⁷ 張忠綱「應該正確評價杜甫的忠君思想」（『山東大学文科論文集』、1982）を参照。

二 肅宗、代宗時代における玄宗像の変化

肅宗・代宗時代に入ると、肅宗・代宗の政治的姿勢が、杜甫が玄宗を評価する際の新たな指標となり、それに応じて杜甫の作品における玄宗像も変容していく。

本論 2.1 で論じたように、至徳年間において肅宗は長安奪回という功績を成し遂げたが、その一方で玄宗は蜀へ逃亡した。このことから、杜甫は玄宗を亡国の暗君として描き出すことになった。しかし、乾元・上元年間になると、肅宗の政治的・道徳的な欠陥が次第に明らかとなり、杜甫の心中における肅宗の明君像は崩壊していく。これに伴い、本論 2.2 で述べたように、杜甫の作品には、かえって玄宗を懐旧する姿勢が見られるようになる。さらに、本論 3.1 で論じたように、代宗の宝応年間から永泰年間にかけては、社会秩序は一層混乱した。その結果、杜甫は詩中で玄宗を模範として称揚し、肅宗・代宗の失政を批判するとともに、代宗に対して玄宗の治世に倣うべきであると諫めるに至ったのであった。

しかし、本論 3.2 で述べたように、大暦年間に入ると、杜甫の晩年における詩風の変容に伴い、玄宗像の描き方は、至徳―永泰年間の作品に見られた強い批判意識に基づく主観的な姿勢とは異なるものとなる。杜甫は、開元期の明君像と天宝期の暗君像とを明確に切り分け、その功績と過失とをそれぞれ検討している。このような玄宗像への描き方は、杜甫の詩の機能が、君主を風刺する「怨」から、唐王朝の衰微の過程を客観的に捉える「観」へと深化することを端的に示すものであり、その点には大暦年間の作品における思想的・歴史的価値が認められる。

三 肅宗、代宗時代における杜甫の「忠君」の再定義

南宋の陸游は、杜甫の人となり「東屯高齋記」で「少陵非区区于仕進者，不勝愛君憂国之心」（杜甫は、決して仕官にのみ熱中する人物ではなく、君主を愛し、国家を憂える心情を抱いていたのである）と詠じている⁸⁸。玄宗時代の杜甫には、確かに「区区于仕進」という仕官に熱中する側面が認められる

⁸⁸ 宋・陸游『渭南文集校注』（浙江古籍出版社、2015）卷十七、212 頁。

が、肅宗・代宗時代の作品においては、むしろ陸游が指摘したような「愛君憂国之心」が表れているのである。蕭滌非も『杜甫研究』において、「杜甫の封建的かつ後進的な忠君思想の中にも、国家や人民にとって有益な要素が含まれており、とりわけ安史の乱以後においては、忠君と愛国とが密接に結びついていた」と指摘している⁸⁹。

安史の乱の勃発に伴い、杜甫は玄宗時代における長安の士大夫という身分から、戦時における流浪の民へと転じ、下層民衆の困窮に直面すると同時に、自身の境遇の悪化にも苦しむこととなった。そのため、至徳―永泰年間において杜甫が三代の君主を対比することによって当時の統治者の失政を批判した表現であれ、大暦年間において玄宗の政治的功績と過失とを総合的に論じた表現であれ、いずれの場合にも、唐王朝の再興と社会秩序の回復への期待と、杜甫自身を含む民衆の生活水準の向上への願望が反映されていると考える。すなわち、玄宗時代における杜甫の「忠君」が、君主を補佐して政治を執るという仕官の志に基づくものであったとすれば、肅宗・代宗時代における杜甫の「忠君」は、国家と民衆の命運に対する深い憂慮を踏まえ、賢明な君主像へと向けられた忠誠心として理解できる。

具体的には、至徳年間においては、玄宗に対する批判の背後に、戦乱を平定した肅宗への「忠」が認められ、乾元年間以降の作品では、肅宗・代宗の失政に対する不満の表明の背後に、相対的に賢明とされた玄宗への「忠」が読み取れる。さらに大暦年間の作品においては、玄宗時代への回顧を通じて、平和と繁栄を象徴する開元期の玄宗像への「忠」が示されているのである。

マルクス主義を基調とする現代中国学界では、封建社会に生きた杜甫の「忠君」を再定義している。張忠綱は、マルクス主義思想においては「国家」が必ずしも「支配階級」と同一視されるものではないことを指摘した上で、杜甫の「忠君」は「愛国」「愛民」と密接に結びついたものであり、現代において

⁸⁹ 蕭滌非『杜甫研究』（齊魯書社、1980）、48頁に「杜甫在他這一落后的封建的忠君思想里面、具有有利于国家人民的内容……特别是在那『万方多難』的安史之乱以后時期、忠君思想是和愛国精神始終是密切結合的」という。

も積極的な意義を有すると論じている⁹⁰。また、陶瑞芝も、マルクス主義的歴史観を欠いていた封建社会の士大夫にとっては、君主と国家との概念がしばしば混同されていたのに対し、杜甫は「人民こそが国家の主体である」という認識を有していた特異な愛国詩人であったと評価している。さらに陶瑞芝は、杜甫の忠君思想が「憐民」「恤民」「愛民」といった民衆への配慮と深く結びついている点を強調している⁹¹。

筆者は、本論で分析してきた杜甫作品における玄宗に関する記述を踏まえると、肅宗・代宗時代における杜甫の忠君意識が、確かに「愛国」および「愛民」と結びついており、上述の見解と軌を一にすると考えられる。しかし一方で、玄宗時代の杜甫は、多くの士大夫と同様に、作品中において君主像をある程度美化しており、そこには仕官を志向する立場に基づく「忠君」意識が色濃く反映されている。この点からすれば、杜甫作品における玄宗像を通じて示される忠君意識は、少なくとも二つの段階に分けて評価されるべきであろう。

以上の考察は、主として杜甫の作品における玄宗像を通じて、その忠君意識の一つの側面を明らかにしようとしたものである。しかしながら、杜甫の忠君意識を全体として把握するためには、玄宗に関する記述のみに依拠することは必ずしも十分とは言えない。今後は、杜甫の作品に見られる肅宗・代宗の君主像の分析を加えるとともに、社会および国家への関心が顕著に表れている作品の分析も行い、杜甫の「忠君愛国」の思想をより多角的に考察していく必要があるだろう。

⁹⁰ 張忠綱「憂国憂民無已時—杜甫愛国思想瑣談—」（『杜甫研究學刊』、1995年第3期）1頁に「他的忠君是和愛国、憂民緊密地連系在一起的。是有一定的積極意義的……」という。

⁹¹ 陶瑞芝「論杜甫的愛国主義」（『杜甫研究學刊』、1994年第1期）1～3頁に「所以在缺乏馬克思主義歷史觀的人的頭腦中、祖国、国家、君主三者常混淆為同一事物……杜甫是位不同尋常的愛国詩人……杜甫的忠君始終是与憐民、恤民、愛民連系着的」という。

参考文献

唐·杜佑『通典』(中華書局、1988)

後晋·劉昫等『旧唐書』(中華書局、1997)

宋·歐陽修等『新唐書』(中華書局、1997)

宋·司馬光『資治通鑑』(中華書局、1956)

宋·王溥『唐会要』(上海古籍出版社、2006)

明·錢謙益『錢注杜詩』(上海古籍出版社、1979)

明·王嗣爽『杜臆』(中華書局、1963)

明·朱鶴齡『杜工部詩集輯注』(河北大学出版社、2009)

清·仇兆鰲『杜詩詳注』(中華書局、2015)

清·楊倫『杜詩鏡銓』(上海古籍出版社、1981)

清·黃生『杜詩說』(黃山書社、2014)

清·浦起龍『讀杜心解』(中華書局、1961)

清·盧元昌『杜詩闡』(台灣大通書局、1974)

清·洪邁『容齋隨筆』(中華書局、2015)

陳夢熊「杜甫詩歌中的帝王形象」(『銅仁學院學報』2014 年第 16 期)

陳貽焮『杜甫評傳』(北京大學出版社、2003)

馮至『杜甫傳』(人民文學出版社、1980)

傅紹良「『昔』與『憶昔』：杜甫往事書寫的文學史意義」(『杜甫研究學刊』2023 年第 3 期)

葛曉音「略論杜甫君臣觀念的轉變」(『中州學刊』1983 年第 6 期)

郭沫若『李白與杜甫』(人民文學出版社、1971)

黃雅莉「杜甫長安時期的干謁詩探究」(『中國韻文學刊』2017 年第 31 期)

- 羅宗強『李杜論略』（内蒙古人民出版社、1980）
- 莫礪鋒『杜甫評伝』（南京大学出版社、2011）
- 歐麗娟『唐詩的樂園意識』（北京大学出版社、2020）
- 齊雯雯「1949 年以來國內杜甫伝記研究」（河南大學修士論文、2024）
- 錢翠霞「試論杜甫的忠君思想的發展和轉變」（首都師範大學修士論文、2000）
- 單芳「從有閨曲江諸詩看杜甫對唐玄宗的系念」（『杜甫研究學刊』1997 年第 3 期）
- 孫微「論杜甫的君臣觀」（『河北大學學報（哲學社會科學版）』2000 年第 25 期）
- 陶瑞芝「論杜甫的愛國主義」（『杜甫研究學刊』1994 年第 1 期）
- 田馨「杜甫在朝詩研究」（西南大學修士論文、2010）
- 魏耕原「杜甫與唐玄宗、肅宗、代宗」（『杜甫研究學刊』2019 年第 1 期）
- 聞一多『唐詩雜論』（上海古籍出版社、2000）
- 吳賢哲「杜甫忠君思想再認識」（『西南民族學院學報（哲學社會科學版）』1987 年第 3 期）
- 蕭滌非『杜甫全集校注』（人民文學出版社、2014）
- 謝思煒『杜甫集校注』（上海古籍出版社、2015）
- 徐建芳「杜甫仕宦心態之研究」（陝西師範大學修士論文、2005）
- 張倩『長安文化視野下的杜甫研究』（中國社會科學出版社、2019）
- 張忠綱「憂國憂民無已時－杜甫愛國思想瑣談－」（『杜甫研究學刊』1995 年第 3 期）
- 趙睿才、劉冰莉、夏榮林『杜詩學通史（域外編）』（上海古籍出版社、2023）
- 朱雪里「李杜與玄肅權爭」（陝西師範大學修士論文、2003）
- 齋藤勇『杜甫:その人、その詩』（研究社、1946）
- 下定雅弘、松原朗『杜甫全詩訳注』（講談社學術文庫、2016）
- 鈴木虎雄、黒川洋一『杜詩』（岩波書店、1963）

川合康三『杜甫』(岩波書店、2012)

黒川洋一『杜甫の研究』(創文社、1997)

目加田誠『杜甫』(集英社、1996)

松原朗編『杜甫と玄宗皇帝の時代』(勉誠出版、2018)

吉川幸次郎,興膳宏『杜甫詩注』(岩波書店、2012)

吉川利一『杜甫の遺産－人間の実存的探求－』(杜甫研究〈第1輯〉、1965)